

4,118

ISSN 0289-6982

大谷大學研究年報

第 52 集

- 他力と無意識……………酒 井 汀
- 宋金代山西の寺院……………桂 華 淳 祥
- 華嚴法界縁起の研究……………織 田 顕 祐
- ラカン理論における欲望とシニフィアン…番 場 寛
—欲望のグラフについて—
- 『大乘莊嚴經論』の諸問題
並びに第11章求法品のテキスト校訂…舟 橋 尚 哉

大 谷 學 會



4,118

大
谷
大
學
研
究
年
報

第
五
十
二
集

大
谷
學
會

THE ANNUAL REPORT OF RESEARCHES OF OTANI UNIVERSITY

No. 52

CONTENTS

- Some Problems in the *Mahāyānasūtrālamkāra* and Corrigenda
of the *Mahāyānasūtrālamkāra* (Chapter XI) ……FUNAHASHI Naoya
- Désir et Signifiant dans la théorie lacanienne
—Sur le graphe de désir de Jacques Lacan— ……BAMBA Hiroshi
- A Study of Causation by Dharmadhātu in Hua-yen Buddhism
……………ODA Akihiro
- Temples in Shanxi during the Song and Jin Dynasties
……………KEIKA Atsuyoshi
- The OTHER POWER and the Unconscious ……SAKAI Migiwa

THE OTANI SOCIETY
OTANI UNIVERSITY

Some Problems in the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* and Corrigenda of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* (Chapter XI)

FUNAHASHI Naoya

Along with the *Madhyānta-vibhāga*, the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* is counted, in both China and Tibet, among one of the five treatises of Maitreya. Moreover, since the Sanskrit, Tibetan and Chinese texts of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* is extant, it is an important treatise of the early phase of the *vijñaptimātra* thought.

There is controversy surrounding the authorship of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra*. Some say it was written by an actual person named Maitreya; others say that it was in fact written by Asaṅga and attributed to Maitreya Bodhisattva; while still others say it was written by more than one person living before Asaṅga's time.

As I have argued previously, Maitreya is most probably not the author of the *Dharmadharmatā-vibhāga*, one of the five works of Maitreya. Some scholars have recently argued that this work was composed sometime after the time of Sthiramati.

The chapter titles of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* and the *Yogācāra-bhūmi* are generally identical. The chapter titles of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* were probably composed on the basis of those found in the *Yogācāra-bhūmi*.

Both the *Madhyānta-vibhāga* and the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* are important works of early *vijñaptimātra* thought. Since the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* quotes from the *Madhyānta-vibhāga*, the latter work was composed at a slightly earlier date than the former. However, they were

both composed at around the same time.

In both the *Madhyānta-vibhāga* and the *Mahāyānasūtrālaṅkāra*, there is the question of whether the verse and prose sections were composed at the same time, or whether the prose was composed after the verse. I believe that the verse was composed slightly (about fifty years) earlier than the prose. However, there is also a strong hypothesis that they were composed at the same time.

Finally, I have included, as far as space allowed, a corrigenda to the text of the *Mahāyānasūtrālaṅkāra*. This installment of the corrigenda is that of the eleventh chapter (*“Dharmaṇḍarī”* chapter) of the treatise.

Désir et Signifiant dans la théorie lacanienne

—Sur le graphe de désir de Jacques Lacan—

BAMBA Hiroshi

Les quatre graphes nommés “graphe de désir”, présentés dans l’article “Subversion du sujet et dialectique du désir dans l’inconscient freudien”, qui est contenu dans les “Ecrits”, ne peuvent être expliqués qu’après s’être référé aux deux séminaires “Formation de l’inconscient” et “Désir et son interprétation”.

Après la lecture minutieuse des deux séminaires, on voit que chaque élément du graphe ne possède pas une dénomination fixe, mais change de nom selon les diverses logiques qui expliquent le mécanisme du désir. Dans tous les graphes de désir, la ligne horizontale signifie toujours “chaîne signifiante” ou “ligne du signifiant”, tandis que la ligne verticale signifie “besoin”, “désir”, “tendance”, “pulsion”, ou “intentionnalité”. Le point d’intersection des deux lignes forme “la demande”. Le point d’intersection change aussi de nom et est appelé “code” et “message” d’une part, “lieu de l’Autre” et “signifié de l’Autre” d’autre part, selon les points sur lesquels veut insister Lacan dans son explication.

Dans l’article cité, contenu dans les “Ecrits”, Lacan explique que l’une des intersections est “le lieu du trésor du signifiant” et que l’autre est “la ponctuation” en tant que “ponctuation où la signification se termine comme produit fini”. Il s’agit alors du cours du temps de deux lignes qui s’entrecroisent. Lacan explique, à cet égard, par le terme *nachträglich* (après coup) que la signification s’achève rétroactivement d’un croisement à un autre. Comme dit Lacan en utilisant l’expression contradictoire que deux lignes s’entrecroisent, en fait, deux fois en même temps, alors que le

of something that one is experiencing but he may get insight into the meaning of that experience someday; or what he has got insight into may be referred to as it had been unconscious until he got the insight. However, the term unconscious can be misunderstood as if it is something that one will never be aware of, and thus it is no use for human beings to wonder about such an entity. This seems to be particularly the case in Japan, because the term unconscious was translated as 'MUISHIKI' that literally means non-consciousness.

2. Both of the two concepts curtail the freewill notion, and presuppose something that exceeds free-will of human beings.
 - (1) In the SHINSHU-Sect, the fate or life of a person is considered to be determined at the mercy of the OTHER POWER.
 - (2) Freud advocated that instinctive drives have unconscious influence on the will of individuals, so that the will of individuals is not so free as it is taken for granted by modern citizens, particularly post-Renaissance Europeans, who tend to trust the consciousness as the ultimate source of freewill.
3. Both of the concepts presuppose people to get aware of the meaning of the concept, in order to be relieved from anxiety.
 - (1) One of the principles of the SHINSHU-Sect is to accept that he is living his life only at the mercy of AMIDA's benevolent power, so that he should yield himself to the faith in the OTHER POWER.
 - (2) One of the curing mechanisms of psychoanalysis is to get insight, with the help of a psychoanalyst, into one's past traumatic experience that has been repressed into the unconscious.
4. It is curiously interesting that both of the originators of the concepts were involved in the precepts about sexuality which they challenged, and they eventually contributed to the emancipation from sexual precepts of their times.

『大乘莊嚴經論』の諸問題
並びに第11章求法品のテキスト校訂

舟橋尚哉

はじめに	3
一 弥勒 (Maitreya) の五部論について	4
二 『大乘莊嚴經論』と『瑜伽師地論』	12
三 『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』	17
四 『大乘莊嚴經論』とその他の初期唯識論書	23
まとめ	28
『大乘莊嚴經論』(求法品)のテキスト校訂	35

はじめに

『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālaṃkāra)は『中辺分別論』(Madhyāntavibhāga^①)とともに、初期唯識思想を伝えている重要な論書の一つである。S. Léviが1898年1月にネパールに到着し、Mahāyānasūtrālaṃkāraの写本を手に入れて、1907年にパリでテキストを出版し、つづいて1917年には同じくパリで仏訳をも出版した。このことによって、従来、『大乘莊嚴經論』の研究は、漢訳が中心であったが、サンスクリット・テキストの出版により、『大乘莊嚴經論』の研究には、梵漢対照で(後にチベット訳も参照して)研究されるようになった。

この『大乘莊嚴經論』の著者についても、偈頌は弥勒なのか、無着なのか、長行は世親が有力であるが、それでよいのかどうか、まだはっきりしていない。また偈頌の部分と長行の部分とが同時に成立したのか、若干の年代差があるのか、かなりの年代差があるのかも、はっきりしていない。

『大乘莊嚴經論』の構成は、『瑜伽師地論』菩薩地の名称と全く一致しているから、^②「菩薩地」の名称を手本にして『大乘莊嚴經論』の各品の名称となったと思われる。

勿論、『大乘莊嚴經論』の各品を参照して、逆に『瑜伽論』の菩薩地の名称が定まったとの考えも、全く皆無というわけではないが、一般に『瑜伽論』菩薩地の方が成立が早いといわれているから、この考え方には少し無理があるように思われる。

また、すでに宇井博士によって指摘されているが、^③『大乘莊嚴經論』覚分品には「『中辺分別論』に説かれる如し^④」という記述がある。このことは『大乘莊嚴經論』に『中辺分別論』が引用されているのであるから、常識的には『中辺分別論』の方が古いことになるが、これは直ちに『大乘莊嚴經論』の長行

の部分、『中辺分別論』の長行の部分よりも後と切り切れるのかどうか。これらのことを中心に『大乘莊嚴經論』と『瑜伽師地論』、また『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』との関係を考察しようと思う。

また、『大乘莊嚴經論』に関する種々の問題点を中心に、『大乘莊嚴經論』とその他の初期唯識論書ということにして、『撰大乘論』や『大乘阿毘達磨集論』、更にはできれば『入楞伽經』との関係も、考察してみようと思う。

これらの考察によって、初期唯識思想の成立過程が少しでも明らかになってくれば、というのが私の願いである。まだまだ不確定な要素が多いので、不十分なままではあるが、一応のまとめとすることにした。

最後に以前、やりかけて途中になっていた『大乘莊嚴經論』のテキスト校訂についても、紙数の許される範囲で検討し、発表することにした。

一 弥勒(Maitreya)の五部論について

弥勒(Maitreya)が歴史上の人物なのか。信仰上の弥勒菩薩に仮託された、実際は無着(Asaṅga)、または無着以前の複数の師を指すのかについては、まだ決着がつかない。

宇井伯寿博士は、かつて「弥勒は歴史上の人物である」と主張され、それが一つの主流になってきたように思う。

宇井博士はその後『中辺分別論』の著者に関して「歴史的人物としての無著の師たる弥勒が無著菩薩に教えたもの、そして無著は此を世親に授けたから、世親は此に註釈を施した」といって、自説を主張されている。

これに対して山口博士は、オーバーミラー氏の所説を紹介し、

「龍樹が文殊菩薩の開頭によりて諸論を製作したと云う伝説と同じく、無著は兜率天上将来仏としての弥勒によりて開発せられて諸論を製作し

たとなすものであり^⑦

といて、『辯中辺論』の著者を無着としている。

更に『辯中辺論』の註釈者世親の帰敬偈を釈する安慧註をあげ、

「論偈の造者は聖弥勒なり、而して彼は一生補処の故に菩薩の神通と陀羅尼と無碍辯と三昧と根と忍と解脱とによりて妙彼岸に到り、菩薩の一切地に於ける障を無く断じたり。ここに説者は軌範師無著なり。軌範師大徳世親は彼〔無著〕より聞きて此論の註を作りたり^⑧」

といて、

「此論の著造者は将来仏の弥勒にして、説者は無著、註釈者は世親となす^⑨」

といい、弥勒は将来仏としての弥勒であって、歴史上の人物とは認めていない。

このように弥勒(Maitreya)が歴史上の人物か否かについては諸説があり、まだ結論が出ていない。しかしながら、古くから弥勒の五部論といういい方で、弥勒著の作品があげられている。

ところで、チベット伝と中国伝(漢訳)とで内容に相違があり、漢訳の中でも一定しない^⑩ようであるが、一般的には中国伝として、

1. 瑜伽師地論
2. 分別瑜伽論(引用のみで現存せず)
3. 大乘莊嚴經論頌
4. 弁中辺論頌
5. 金剛般若論頌

などの五論^⑪があげられている。

またチベット伝として、

1. Mahāyāna-sūtrālaṅkāra 大乘莊嚴經論頌

2. Madhyāntavibhāga 中辺分別論頌^⑫
 3. Dharmadharmatāvibhāga 法法性分別論頌^⑬
 4. Abhisamayālaṅkāra 現觀莊嚴論頌
 5. Uttaratantra 究竟一乘寶性論頌^⑭
- などの五論があげられている。

この中で、チベット伝と中国伝とで共通にあげられている論書は、

1. 大乘莊嚴經論頌 Mahāyāna-sūtrālaṅkāra
2. 弁中辺論頌 Madhyāntavibhāga

の二論のみである。それ故、この二論はチベット伝でも、中国伝でも弥勒造という伝承があり、重要な論書であるといえよう。

それではチベット伝において、「弥勒の五部論」ということは、いつ頃からいわれるようになったかというに、すでに袴谷憲昭氏が論じているように、チベット最古の訳経目録『デンカルマ』（824年成立）においては、

「アサンガ Asaṅga の地の五部（五部からなる『瑜伽師地論』を指す）と二種の綱要書（『撰大乘論』と『阿毘達磨集論』とを指す）、及びヴァスバンドゥ^⑮ Vasubandhu の八論書のみを網格として諸典籍名を列举しようとした」といって、この当時には弥勒の五部論（マイトレーヤの五法）の記述は全く見あたらないとのことである。

そして十一世紀に至って、再びチベット仏教は盛んになるが、その頃、マイトレーヤ造とされる五論典中の三論典即ち『法法性分別論』『究竟一乘寶性論』『現觀莊嚴論』などが翻訳されたようである。従って十一世紀以後に、チベットにおいて「マイトレーヤの五法」ということがいわれるようになったようである。

ところで、チベット伝において、マイトレーヤの五法の一つに数えられている『法法性分別論』であるが、私もかつて「唯識思想の成立について——

唯心から唯識へ——」（仏教学セミナー第49号 昭64年）で論じたように、

「『大乘莊嚴經論』の偈頌の部分は弥勒または無着といわれているが、この部分には vijñapti-mātra（唯識）は用いられていない。その顕著な例は『大乘莊嚴經論』の求法品第34偈と第35偈である。長行には、唯識（vijñapti-mātra）を求めるについての二偈といいながら、第34偈では『心は二として顕現する云々』、第35偈では『心は種々に顕現し、種々の行相を生起する』とあって、vijñapti ではなく citta となっているから、第35偈の直前の長行では唯心（citta-mātra）のみである^⑰」

と説かれたのであろう。

従って『大乘莊嚴經論』の偈頌、すなわち、弥勒の所説の中には vijñapti-mātra はまだ説かれていないと思われるのに、『法法性分別論』では、世親の註釈の部分ばかりでなく、弥勒に帰せられる本文の中にも、vijñapti-mātra（唯識）に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam という語が三回も見出される。

すでに論じたことであるが、資料を正確に提示するため、ここに再検討する。

まず『法法性分別論』の世親の註釈の上では、

「正加行への悟入は四種である。すなわち、（一）得加行は唯識（vijñapti-mātra）を了得する故に。（二）不得加行は外境を了得しない故に。（三）得不得加行は外境なきときは唯識（vijñapti-mātra）も了得しない故に。表識の境なきときは、表識はありえないからである。（四）不得得加行は〔所取なる義と能取なる識との〕二は実には二性として有らざる不可得によりて無二（平等）を得知するが故なり^⑱」

と説かれており、vijñapti-mātra という語が二回も用いられている。この箇所は幸いにして、サンスクリット断片が存在するので、サンスクリットは

vijñapti-mātra であることが確認できる。

私が注目しているのは、弥勒に帰せられている『法法性分別論』の本文の上でも、Sk. vijñapti-mātra に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam が三回も説かれていることである。

「かくの如く得知するによりて唯識(vijñapti-mātra)の得知に入る。唯識(vijñapti-mātra)と得知するによりて、一切の境の不得知に悟入する。一切の境の不得知により唯識(vijñapti-mātra)の不得知に悟入する」^⑬ ここには明らかに『法法性分別論』の本文の上で、vijñapti-mātra(唯識)が説かれている。すなわち、弥勒の本文の上に vijñapti-mātra が説かれていることになる。

『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』の偈頌(弥勒造といわれる)の上で vijñapti-mātra が一度も使われていないのに、弥勒造といわれる『法法性分別論』には三回も vijñapti-mātra に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam が用いられていることに不自然さを感じる。

従って私は『法法性分別論』は弥勒の五部論から除くべきであろうと思っていたところ、袴谷憲昭氏も『法法性分別論』が弥勒造ということに疑問をもっていて、

「マイトレーヤ(Maitreya 弥勒)に帰される『法法性分別論』の方は、その著者に関する伝承から推測されるほどに古いものではなく、後に展開した術語を自明のごとく前提とした上で述作されており」^⑭

といい、更に『法法性分別論』が後代の作品であることを断定して、

「五法のうち、紛れもなく後代に作られたと思われるものは、『法法性分別論』のみである」^⑮

と述べている。

また勝呂博士も『初期唯識思想の研究』の中で、

「『法法性分別論』は『瑜伽論』『撰大乘論』より後の作成であろうと思う」^⑯と述べておられるから、無着造の『撰大乘論』より後の作成であるということは、勿論、『法法性分別論』は弥勒造ではなく、もっと後の作成ということであろう。

それでは vijñapti-mātra という語は、弥勒の論書の中に全く説かれていないかといえば、そうではない。この語が最初に用いられたのは、おそらく『解深密經』の分別瑜伽品(従って弥勒造といわれる『瑜伽論』撰決択分卷七十七と同じ)におけるものであろうといわれている。

「世尊よ、毘鉢舍那(vipaśyanā)を行う三摩地(samādhi)の行境は影像(bimba, pratibimba)であります。それは何ですか。かの心と異であるか、異でないかといえば、慈氏よ、異ではないといわれる。何故に異ではないのかといえば、かの影像は唯識(vijñapti-mātra)であるからである。慈氏よ、識の所縁は唯識(vijñapti-mātra)によって顕わされると私は説くのである」^⑰

ここには明らかに vijñapti-mātra(唯識)という語が用いられている。

しかし高崎直道博士も論じておられるように、ここには(一)有分別影像、(二)無分別影像、(三)事の辺際、(四)所作の成弁の四つの所縁が説かれているが、これに先行する『瑜伽師地論』の「声聞地」ではこの四種所縁は説かれているが、唯識(vijñapti-mātra)は説かれていない。従って「声聞地」の所説の方が古いことは明らかであるが、これをすべて同一人物、弥勒(Maitreya)に帰してよいかどうかの問題も残る。

このような背景のもとに、私は『法法性分別論』には vijñapti-mātra(唯識)が三回も出るのは不自然であり、従って私はこの論を弥勒の著とするところには、疑問があると論じたのである。^⑱

ところが最近『法法性分別論』は、もっと後世のもので、安慧(Sthiramati)

以後の成立であると、松田和信氏が論じている。

「4、『法法性分別論』は初期唯識文献ではない。

最近では、袴谷憲昭、勝呂信静、舟橋尚哉等の諸氏の研究を通して、Dh. DhV(法法性分別論)の所説が、すでに完成した唯識思想を前提としているとの指摘が次々となされている。本稿での筆者〔松田和信〕の取上げた点からも、NPD(入無分別法門經)が Dh. DhV(法法性分別論)に先行する文献であることは確実であるように思われる。しかし²⁷ NPD(入無分別法門經)は、スティラマティ以前の文献には遡り得ない」

〔 〕は筆者(舟橋)が補った。

ここには私の名前まで出ていて、恐縮しているが、私は単に『法法性分別論』は、弥勒のものではないと論じただけであって、そんな後世の論書であると論じたわけではない。勝呂信静博士も、

「『法法性分別論』は『瑜伽論』『攝大乘論』より後代の作成であろうと思う²⁸」

とっておられるだけである。

袴谷憲昭氏は「五法のうち、紛れもなく後代に作られたと思われるものは、『法法性分別論』のみである²⁹」といているから、かなり後代のものと考えているようである。

このように「弥勒の五部論」といっても、中国の伝承とチベットの伝承³⁰とは「五部論」の内容が異なっているし、中国伝の中でも一定していないようである。

チベット伝の内、弥勒の五部論の一つである『究竟一乘宝性論』³¹については、宇井博士は堅慧作ともいわれる。

また弥勒の五部論を無着著とすることもいけないといわれる。

「最近の学者、例えばオーバーミラー博士等は、弥勒菩薩の五法は、凡

て事実無著の作であるが、後世弥勒菩薩の作と信ぜられるに至ったものである、となす如き考を有し、此考が他の人々の間にも比較的によく行われて居るように見える。(中略)

極端な説になると、無著が自ら論を著はし、それを権威あらしめる為に、当来仏たる弥勒菩薩に仮託したに外ならぬとまで論ずる人もある。

(中略)

五法の中の究竟一乘宝性論を取って考えて見れば、これ等が凡て無著の著述であるなどとは到底断定せられ得るものではない³²」

このように宇井博士はあくまでも五部論は弥勒に帰せられる著であるが、中にはもっと後世のものも入っている。すなわち、この『究竟一乘宝性論』も後世のものの一つと考えておられるようである。

私も学部時代、『究竟一乘宝性論』のテキストを授業で講読していて、その後、興味のあるところを読んでいたが、第一章、三宝品の第一仏宝に、

「『不清淨な』は『幼童凡夫の煩惱障によって』であり、『不離垢な』は『声聞独覚の所知障によって』であり、『有汚点』は『菩薩の右の二の何れかとも異なるもの、即ち習気、によって』であり」(宇井訳496頁)

とある記述が、『大乘莊嚴經論』の安慧釈の「煩惱障と所知障との習気³⁴」と類似しているというより、更に一步発展させたものと思われるところから、何となく『究竟一乘宝性論』は弥勒の作ではない。もっと後期の作品ではないかと考えていたが、袴谷憲昭氏がいうように、

「前期に訳されることなく終った三論典、即ち『法法性分別論』『究竟一乘宝性論』『現觀莊嚴論』が翻訳されたこの後期伝播期に関係していたであろうのおよその見当はつけることができる³⁵」

ということであれば、『究竟一乘宝性論』も後世の成立の論書かもしれない。

このように弥勒の五部論を考察してきたが、弥勒の五部論というのは、昔

から定まっっていて、確定しているのかと思っていたが、いろいろな角度から考察してみると、必ずしも一定していないし、ときには後世の作品まで弥勒(Maitreya)の著作とされて、権威づけられていることがわかる。

二 『大乘莊嚴經論』と『瑜伽師地論』

『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』は、チベット伝も中国伝も、ともに偈頌は弥勒ということになっていて、その上、思想的にも言葉遣いの上でも共通性があるように思われる。

ところが『瑜伽師地論』は、確かに中国伝では、弥勒の五部論の一つに数えられ、弥勒に帰せられているが、チベット伝では弥勒造には数えられていない。

かつて横山紘一氏は、「五思想よりみた弥勒の著作——特に『瑜伽論』の著者について——」において、虚妄分別の原語に関して、『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』では、abhūta-parikalpa が使われているのに、『瑜伽論』では vikalpya, vitatho vikalpaḥ, vikalpa などが使用され、abhūta-parikalpa は一度も使われていない。

また『法法性分別論』や『大乘阿毘達磨集論』『攝大乘論』なども、abhūta-parikalpa に相当するチベット訳 yañ dag pa ma yin paḥi kun [tu] rtog pa などが用いられている。これらのことから、横山紘一氏は、

「玄奘訳『瑜伽論』百巻中、虚妄分別という語は十個所に認められるが、その梵語、或は梵文の欠如する個所はチベット語訳を調べると、前表に示したように、abhūta-parikalpa 及びその類似語ではない。abhūta-parikalpa 及びその類似語に対する玄奘訳は常に虚妄分別で統一されていることを考え合せると、『瑜伽論』の梵本には、abhūta-parikalpa 及び

その類似語は、全く存在しないと断定出来得るであろう。ところで『瑜伽論』の著者を『中辺分別論頌』の作者と同一人物であると考えれば、以上の事実は全く奇妙と言わざるを得ない。勿論、同一人物の著者間に同一語が見出されなくとも、必ずしも不思議ではないが、『瑜伽論』の如き膨大な分量を考えるならば、一度なりとも使用されてしかるべきであろう。しかるに、一語も認められ得ないという事実は、『瑜伽論』が弥勒の作ではない、或は、少なくとも、『中辺分別論』の作者と同一人物の作ではない、という一説への一論証となるのではあるまいか^⑦

と論じておられる。少し長く引用しすぎた感もなくもないが、『瑜伽論』の著者を考察するには、大変重要な視点でもあるので、あえて引用した。

横山紘一氏が「『瑜伽論』が弥勒の作ではない。或は、少なくとも、『中辺分別論頌』の作者と同一人物の作ではない^⑧」という結論は、一応正しいように思われる。ただ同一人物でも初期と後期とでは、言葉遣いが変わる場合もあるので、100パーセント正しいとはいいい切れぬ。例えば『瑜伽論』の成立(この場合、菩薩地や声聞地の成立と考えた方がよい。なぜなら、当該の語〈vikalpya, vitatho vikalpaḥ, vikalpa〉は菩薩地に三ヶ所も出ているから)が『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』より若干成立が早く、その時代にはまだabhūta-parikalpa という語が使われていない場合だとすると、同一人物であっても可能性はあるが、最近のように、『瑜伽論』を編纂した中心人物は無着(Asaṅga)であるということになれば、無着は『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』や『攝大乘論』に関係しているから(向井氏は弥勒の実在人物説を否定するから、『中辺分別論』と『大乘莊嚴經論』との頌は無着造になると思う)、『瑜伽論』の中にabhūta-parikalpa(虚妄分別)という語が一度位用いられてもよいではないかという疑問が生ずる。つまりabhūta-parikalpa という語が、当時の唯識思想を表現するのにふさわしい語となっていたのなら、

『瑜伽論』でも、一度や二度は用いられてしかるべきかと思われる。

それでは『瑜伽論』で用いられる vikalpya, vitatho vikalpaḥ, vikalpa など④の語は、abhūta-parikalpa の語より、古い言葉といえるのかどうか。正確なことはまだわからないが、一応これらの言葉が『瑜伽論』の中でも比較的古い成立といわれている「菩薩地」(Bodhisattva-bhūmi) に三ヶ所も出ている。そうすると、これらの言葉は abhūta-parikalpa が用いられる以前からあった言葉といえるのではないだろうか。

『瑜伽論』自体、膨大なものであるから、同じ時期に一度に成立したとは考えにくい。ある部分は古く、ある部分は編纂の時に成立したかもしれない。

それに『中辺分別論』の相品第一偈に、「虚妄分別はあり」といって、abhūta-parikalpa (虚妄分別) という語が偈頌の中に用いられているから、偈頌と長行との年代差をどの位に見るかによっても異なるが、比較的古い言葉かもしれない。そうすると、『瑜伽論』の編纂の時に abhūta-parikalpa という語が成立していたのに用いなかったか、あるいは、この語がまだ成立していなかったかの疑問が残る。これらの問題は、弥勒に帰せられる論書の成立年代とも関連するので、今後の課題であろう。

「はじめに」の中で、『大乘莊嚴經論』の構成は、『瑜伽論』菩薩地の名称と全く一致しているから、「菩薩地」を手本にして『大乘莊嚴經論』の各品の名称となったことは疑いない④と述べたが、このことは宇井博士や早島理氏④それに最近、勝呂信静博士の大著の中でも、すでに指摘されているが、今ここに各品の名称だけあげると次頁の如くである。

これらによって『瑜伽論』菩薩地と『大乘莊嚴經論』との関係が明らかになってきたと思うが、『瑜伽論』は「声聞地」や「菩薩地」などの比較的古い部分と、「撰決択分」(巻51-巻80)以下の部分とでは、若干の年代差があるようにもみえる。しかし勝呂博士の研究によれば、「声聞地に説くごとし」とか

『瑜伽論』菩薩地

1. 種性品
2. 発心品
3. 自他利品
4. 真実義品
5. 威力品
6. 成熟品
7. 菩提品
8. 力種性品(1)勝解多
9. (2)求法
10. (3)説法
11. (4)修法行
12. (5)正教授
13. (6)教誡
14. (7)方便撰三業
14. 六度(1)施品
- (2)戒品
- (3)忍品
- (4)精進品
- (5)静慮品
- (6)業品
- 撰事品
15. 供養親近無量品
16. 菩提分法
17. 功德品
18. 持随法瑜伽処
- 持究竟瑜伽処

『大乘莊嚴經論』

1. 成立大乘品
2. 帰依品
3. 種性品
4. 発心品
5. 行品
6. 真実品
7. 威力品
8. 成熟品
9. 菩提品
10. 勝解品
11. 求法品
12. 説法品
13. 修法行
14. 教授教誡品
15. 方便業品
16. 波羅蜜多品
17. 供養親近無量品
18. 菩提分品
19. 功德品
20. 行建立品
21. 行建立品

漢訳

1. 縁起品
2. 成宗品
3. 帰依品
4. 種性品
5. 発心品
6. 二利品
7. 真実品
8. 神通品
9. 成熟品
10. 菩提品
11. 明信品
12. 述求品
13. 弘法品
14. 随修品
15. 教授品
16. 業伴品
17. 度摂品
18. 供養品
19. 親近品
20. 梵住品
21. 覚分品
22. 功德品
23. 行住品
24. 敬仏品

「撰決撰分に説くごとし」といって各部分が相互に引用し合っているとのことである。

ということは『瑜伽論』百巻が完成した段階では、現在の『瑜伽論』に近いものであり、例えば本地分(巻1-巻50)だけが先に成立していて、撰決撰分(巻51-巻80)以下が附加されたということはあるにないことになる。

そればかりか、「菩薩地」に相当する「菩薩地持經」にも「如撰事処説」(大正30, 904b)とか、「如声聞地」(大正30, 927a)とか説かれていることは「菩薩地」や「声聞地」だけが先に成立していたということも考えにくくなる。

しかしながら勝呂信静博士も、

「本地分には『解深密經』の思想的影響が見られないのに対して、撰決撰分にはそれが認められ、撰決撰分の作成には『解深密經』が関与している^⑭と見られる」

といわれ、「『解深密經』の成立は本地分と撰決撰分との中間であると推定」されている。

『解深密經』は瑜伽唯識派の所依の經典といわれながら、漢訳(玄奘訳)でいえば、『瑜伽論』巻75(後半)、76、77、78と大部分が一致している。すなわち、『瑜伽論』では巻75の途中から、「如_二解深密經中_一」(大正30, 713c)とあって、『解深密經』の勝義諦相品をまるごと引用し、『瑜伽論』の巻76では、やはり「如_二解深密經中_一」(大正30, 718a)とあって、『解深密經』の心意識相品と一切法相品と無自性相品とに全く一致している。

また『瑜伽論』巻77でも、やはり「如_二解深密經中_一」(大正30, 723b)とあって、『解深密經』の分別瑜伽品と全く一致している。更に『瑜伽論』巻78でも、やはり「如_二解深密經中_一」(大正30, 729a)とあって、『解深密經』の地波羅蜜多品と一致し、また「分_二別如来成所作事_一」とあり、「如_二解深密經中_一」(大正30, 733c)とあって、『解深密經』の如来成所作事品と全く一致してい

る。

ただし『解深密經』の序品だけは、『瑜伽論』に全く出ていないから、おそらく『解深密經』として流布するときに、經典としての形を整えるために附加されたものであろう。

ここで問題になるのは、『瑜伽論』は本当に『解深密經』を引用したのか、すなわち、『解深密經』の方が先に成立していたのか、それとも『瑜伽論』を編纂する段階で『解深密經』は成立したのか、それとも『瑜伽論』から別出して『解深密經』が成立したのか、という問題である。

『解深密經』は玄奘訳であるから、『瑜伽論』(玄奘訳)と訳語まで一致しているが、『解深密經』以外に、菩提流支訳の『深密解脱經』がある。更に部分訳ではあるが、真谛訳の『解節經』や、また求那跋陀羅訳の『相續解脱地波羅蜜了義經』もある。

『解深密經』と『瑜伽論』とがこれだけ一致することは、同じ内容の文章が片方では經典とされ、片方では論書とされているので、大乘經典はどのようにして成立したのか、という問題を考える場合に、何か重要なヒントが隠されており、重要な資料になるかもしれない。これも今後の課題の一つであろう。

三 『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』

「弥勒の五部論」の中でも述べたように^⑮、『大乘莊嚴經論』(Mahāyāna-sūtrāṅkāra)と『中辺分別論』(Madhyāntavibhāga)との二論は、チベット伝も、中国伝もともに「弥勒の五部論」の一つとして数えられており、初期唯識思想を伝えている重要な論書である。

『大乘莊嚴經論』は偈頌は弥勒または無着といわれ、長行は無着または世

親といわれていたが、最近では長行は世親が有力である。一方、『中辺分別論』は偈頌は弥勒または無着といわれ、長行は世親といわれている。

従来、長行の部分は『大乘莊嚴經論』は無着で、『中辺分別論』は世親といわれていたので、何となく『大乘莊嚴經論』の方が『中辺分別論』より成立が早いと思っていたが、『大乘莊嚴經論』覚分品には「『中辺分別論』に説かれる如し^{⑤1}」とあることにより、『大乘莊嚴經論』に『中辺分別論』が引用されているのであるから、常識的には『中辺分別論』の方が先に成立していたことになる。はたしてそれでよいのかどうか。

ところで『大乘莊嚴經論』に「『中辺分別論』に説かれる如し」の引用があることを指摘し、最初に論じられたのは宇井伯寿博士だと思ふ。すなわち、宇井博士は、

「莊嚴經論の第16の43、シナ訳第17の36の釈に、四念処の十四種の勝修の第三、入諦勝修を解釈して、

入諦勝修とは、謂く、其次第の如く、次第に苦集滅道の諦に入るが故なり。

自ら入り他の入ること、中辺分別論に説くが如し。

とあるが、これは中辺論対治修住品第4の第1偈に、四念処について、

僂重と愛の因との故に、我事と不愚扶との故に、

四聖諦に入る為に、四念処の修習がある。

と^{⑤2}いい」

といわれ、ここの「中辺分別論に説くが如し」の個所は、玄奘訳「辯中辺論」では、

「以僂重愛因 我事無迷故

為入四聖諦 修念住^{⑤3}應知」(大正31, 471b)

に相当するが、サンスクリット原本では、

dauṣṭhulyāt tarṣa-hetutvād vastutvād avimohataḥ
catuḥ-satyāvatārāya smṛty-upasthāna-bhāvanā IV 1^{⑤4}

となっている。

ここは三十七道品中の四念処(四念住)を説く個所であるから、これによって『大乘莊嚴經論』の長行の部分は、『中辺分別論』の偈頌より後の成立であることは明らかであるが、『中辺分別論』の長行よりも後の成立といえるのかどうか、問題となるところである。このことに関して、宇井博士は、

「莊嚴經論の釈は、中辺論頌よりも後の作なることは明かであるが、恐らく中辺論の釈よりも後の作というべきものであろう^{⑤5}」

といっておられるが、『大乘莊嚴經論』も『中辺分別論』も長行の部分は世親(Vasubandhu)の作ということになれば、ほぼ同じ頃に成立したと考えてもよいだろう。

ただ『大乘莊嚴經論』にしても、『中辺分別論』にしても、長行の部分は同じ頃に成立したとしても、それぞれの偈頌の部分が先行して成立していたかどうか問題となる。

まず初めに『大乘莊嚴經論』の場合でいえば、私は偈頌の成立と長行の成立の間には若干の年代差があると考えている。その理由は、

1. 偈頌は弥勒または無着に帰せられているが、長行は世親菩薩造となっている。
2. 偈頌には vijñapti-mātra (唯識) は出ず、唯名 (nāma-mātra) となっていたり(求法品第48偈)、citta-mātra (唯心) を意味する「心が二の顯現をなす」(求法品第34偈)となっているが、長行では vijñapti-mātra が用いられている。(求法品第47偈の長行、第48偈の長行)
3. 偈頌には阿頼耶識 (ālaya-vijñāna) という語が見あたらないが、長行では「阿頼耶識の転依」(求法品第44偈の長行) が説かれている。

また『中辺分別論』でも、偈頌には vijñapti-mātra (唯識) も阿頼耶識 (ālaya-vijñāna) も、勿論、出ていないが、長行の部分では相品第六偈の長行に、vijñapti-mātra (唯識) は二回も出ているし、また無上乘品第二十六偈の長行には、vijñapti-mātra-jñāna という語が二回も出ている。

ālaya-vijñāna も相品第九偈の長行に一回と、真實品第二十三偈の長行に一回出ている。

従って『大乘莊嚴經論』の場合、偈頌の成立と長行の成立との間では、若干の年代差があるように思うが、宇井博士はこの間の年代差をあまり考えずに、偈頌の造者と長行を釈する人との間には、極めて親近の関係にあるか、または口伝、指示があったにちがいないといわれる。その理由は『大乘莊嚴經論』第一章成立大乘品の第十六偈において、

śrutam niśrityādau prabhavati manaskāra iha yo⁵⁶

「聞に依止して、初めにここに如理作意が生じ⁵⁷」

と説かれているが、この yo を見て、「頌に yo とあるのは yoniśas (如理に)⁵⁸ という意」と註釈ができるのは、

「かかる解釈は此釈全体が頌作者と極めて親近の関係にあるを示すものであろう。口伝、指示などがなくば、yo が yoniśas だなどとどうしていえようか⁵⁹」

といて、宇井博士は偈頌の作者と長行を釈する人との親近性を主張されている。確かに yo と偈頌にあるのを見て、代名詞の yo ではなく、yoniśas と解釈するのだから、やはりそこには口伝や指示があったのであろう。この場合、無着と世親は兄弟であるから、偈頌の作者が無着で、長行を釈する人が世親であれば問題はないが、偈頌を弥勒として、長行を釈する人が世親であれば、偈頌と長行との間に、若干の年代差を考えなくてはならないであろう。

ところで十自在ということが、『十地経』(従って華嚴経「十地品」)に説か

れているが、華嚴経「世間品」にも説かれている⁶⁰。また『攝大乘論』⁶¹や『大乘阿毘達磨集論』にも説かれている⁶²。『顯揚聖教論』第八には次の如く説かれている。

「十種自在名爲_二功用_一。何者爲_レ十。一寿自在。二心自在。三衆具自在。四業自在。五生自在。六願自在。七勝解自在。八神變自在。九智自在。十法自在」(大正31, 517b)

その他、十自在は『究竟一乘宝性論』やハリバドラの Abhisamayālaṃkāra-lokā Prajñāpāramitā-vyākhyā などにも説かれているが、一々の説明はない。

ところが『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』では、十自在ではなく、四自在が説かれている⁶⁴。『大乘莊嚴經論』求法品第四十五偈、第四十六偈では、

「意と執受と分別とが転ずる故に、実に、無分別と国土と智慧と業とにおいて、自在は四種である」(第四十五偈)

「そして不動等の三地において、かの四種の自在がある。一方の〔不動地〕には二種がある。それより他(善慧地と法雲地)には一つ一つの自在が考えられている⁶⁵」

と説かれ、その長行では、

「そして不動等の三地において、ここでいう、かの四種の自在が知らるべきである。一方の〔第八〕不動地には二種がある。(1)無分別〔自在〕において、無行・無分別の故に、(2)また国土〔自在〕において仏国土を清浄にする故に。その他の地においては一つ一つの自在がある。〔第九〕善慧〔地〕において智慧自在がある。殊勝な無礙解が得られる故に、〔第十〕法雲〔地〕において、業における〔自在〕がある。神通の諸業の無障礙の故に⁶⁶」

と説明されている。

また『中辺分別論』障品では、第八地、第九地、第十地に関連して次の如く「四自在」が説かれている。

「四自在とは、(1)無分別自在と、(2)浄土自在と、(3)智自在と、(4)業自在とである。その中、第八地によって法界における初めの〔自在〕(無分別自在)と第二の自在(浄土自在)の所依止を通達する。第九地において智自在の所依止を〔通達する〕。無礙解を得る故に。第十地においては業自在の所依止を〔通達する〕。思うがままに変化して有情の利益を為す故に」と。

十自在は諸經論にしばしば説かれているが、四自在はあまり説かれていないと思う。しかも四自在に関する『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』の所説は全く一致している。すなわち、第八不動地には二種あり、(1)無分別自在と(2)国土清浄の浄土自在とである。第九地は(3)智〔慧〕自在であり、第十地は(4)業自在である。

ここで『中辺分別論』だけでは、「思うがままに変化して有情の利益を為す故に」という記述はあるが、何故、業自在が四自在において、最後の第十地で説かれるのかわかりにくい。しかし『大乘莊嚴經論』第四十三偈の長行を見ると、業の殊勝は変化〔身〕と関連して次の如く説かれているので、この疑問に解答が与えられるように思われる。

「殊勝は五種の殊勝によってである。①清浄の殊勝にあってとは、習気と共なる煩惱が清浄の故に、②遍く清浄の殊勝によってとは、国土の遍く清浄の故に、③身の殊勝によってとは法身によって、④受用〔身〕の殊勝によってとは衆会(parśanmaṇḍala)において断絶のない法の受用が行なわれる故に、⑤業の殊勝によってとは、兜率天宮に住する等の変化〔身〕によって衆生利益の事業を行なう故に」

ここに業の殊勝が三身すなわち、法身、受用身、変化身の中の変化身と関

連して説かれていることは注目に値する。

いま『大乘莊嚴經論』の四自在が説かれる求法品第四十六偈を見るに、先に述べた如く、「意と執受と分別とが転ずる故に」とあるが、これはいうまでもなく、有名な求法品第四十偈の三種三種の顕現の「意と執受と分別としての顕現」と関連している。

これら「意と執受と分別との転依」が(1)無分別自在と、(2)国土自在と、(3)智慧自在及び(4)業自在に相当する。そしてこれらの自在が十地と関連して、無分別自在と国土自在は第八地に、智慧自在は第九地に、業自在は第十地に説かれている。

先の論文では、『中辺分別論』の所説だけではわかりにくい、『大乘莊嚴經論』の所説を見ると、第十地業自在の記述に納得がいくから、『中辺分別論』の所説は『大乘莊嚴經論』の所説を前提としているのではないかと論じたが、これは必ずしもそうとはいえず、逆に『大乘莊嚴經論』の方が『中辺分別論』より成立が後だから、長行で詳しく論じられたのかもしれないので、この点についてはまた別の機会に論ずることとする。いずれにしても、『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』とは思想的には類似点も多いので、著者も同一人物である可能性が強いと思われる。

四 『大乘莊嚴經論』とその他の初期唯識論書

『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』とは、思想的にも共通性があり、偈頌は弥勒または無着であり、長行の部分は世親であるといわれる。(『大乘莊嚴經論』の長行の部分は無着または世親ともいわれるが、最近では世親説が有力である。)

ところで『大乘莊嚴經論』と密接な関係をもつ、初期唯識論書といえば、

『撰大乘論』であろう。すなわち『撰大乘論』には『莊嚴經論』の頌が、十三個所、四十頌ほどが引用されている⁷³。

この引用頌については、勝呂博士が詳細に検討されているので、今は一一論じないが、その中で勝呂博士は、

「もし『莊嚴經論』が無着の自著であれば、その文脈は原則的に両書において類似あるいは一致していなければならないはずである。文章作成の心理から考えてみても、同一の著者が同一の頌句を異なった文脈において用いるということは甚だありえないことのように思われる。同一の作者であれば、頌句の形成する文脈はおのずから類似したものとなるであろう。これに対し、その文脈が異なっているならば、作者は別人と見られる可能性が強いのであって、無着は『莊嚴經論』の頌を利用したのであるが、それは自著ではないということになるであろう」⁷⁴

といわれる。そして、個々の偈頌を検討され、『大乘莊嚴經論』求法品第二十四偈の「迷乱の因と迷乱云々」と『撰大乘論』所知相分の偈頌並びに註釈を検討して、

「『莊嚴經論』と『撰大乘論』において、この頌の意味は全く同じであるとはいいがたい。『撰大乘論』は自説に合致するように『莊嚴經論』の文意を多少改めてこの頌を引用しているのである」⁷⁵

といわれる。

また『莊嚴經論』信解品第十一偈の「無量の人である衆生は云々」と『撰大乘論』入所知相分の場合も、

「『撰大乘論』は『莊嚴經論』とは異なった文脈においてこの頌を用いていることは確かであろう。この点においてやはり当頌を利用したものであると判断して差支えないと思う」⁷⁶

といわれる。また『莊嚴經論』功德品第五十偈の「現前に立てられた相と云々」

と『撰大乘論』入所知相分の場合でも、

「両書の釈の表現はかなり異なっている。これはそれぞれの釈は本文の文脈にしたがって釈しているのであって、註釈者独自の立場で註釈したものであることを示すものであろう」⁷⁷

といわれる。その他、『大乘莊嚴經論』の功德品第四十七偈の場合も、

「しかし細かく見ると、両書には力点の置き方の相違が認められる」⁷⁸

といわれる。次に『大乘莊嚴經論』真實品第六偈～第十偈の五偈が『撰大乘論』に引用されている場合は、『大乘莊嚴經論』の名を出して引用している有名な箇所である。勝呂博士は、

「両書の註釈を見ると趣意は異ならないにしても、『撰大乘論』の方が『莊嚴經論』よりもかなり詳細である」⁷⁹

といわれるように、『莊嚴經論』の趣意にそって『撰大乘論』の註釈は更に詳しく論ぜられたと思われる。

『大乘莊嚴經論』真實品の第六偈～第十偈の引用は別として、『撰大乘論』の解釈と『大乘莊嚴經論』の解釈とは、必ずしも合致していない。ということは、無着(Asaṅga)が両書とも作ったということは疑わしくなってくる。『撰大乘論』は無着の作ということは一般に認められているので、そうすると、『大乘莊嚴經論』の偈頌と長行の作者は誰かという問題が起こってくる。

特に偈頌について、無着(Asaṅga)作とすると、自分で造った偈頌を『撰大乘論』に引用して、『大乘莊嚴經論』の解釈と趣意の異なる解釈をするであろうか。また何故、『莊嚴經論』「真實品」の引用だけ『大乘莊嚴經論』よりの引用と明記するのであるか。

このように考えてくると、『大乘莊嚴經論』の造論者と『撰大乘論』の造論者とは、同じ Asaṅga(無着)であることに疑問を生じてくる。これはあま

りにも大きな問題であるので、今後の課題としておく。

それ以上に疑問なのは、『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』は同じ傾向の論書であると思われるので、同一人物がかかわっていると思われるが、『瑜伽論』はどう見ても、少し傾向を異にしている、同じ著者とは考えにくい。

『瑜伽論』の方が成立がやや早く、用語や思想も異なるところがあるのに、これを同一人物の時代的な差、たとえば初期の作品と中期または後期の作品とに理解してよいかどうかの問題である。これも今後の課題としておこう。

『大乘莊嚴經論』には見あたらないが、『瑜伽論』には十因が説かれている。すなわち『瑜伽論』には巻五の本地分中、有尋有伺等の三地之一を説く個所と、菩薩地(巻三十八)と、それに最後の摂事分巻百との三個所において、十因が説かれている。

瑜伽論巻五の本地分中、有尋有伺の三地之一を説くところでは、まず「因と縁と果との依処(adhiṣṭhāna)は何か」と問い、「語(vāc)、領受(anubhava)、習気(vāsanā)等の十五種の依処をあげている。次に「因と縁と果との差別は何か」と問い、「十因と因縁と五果とである」といって、十因(daśa-hetu)を説いている。すなわち、「随説因、観待因、牽引因、生起因、摂受因、引発因、定異因、同事因、相違因、不相違因」である。そしてこれらは先の「十五種の依処」に関連して説かれている。例えば、「語の依処によって随説因が施設される」とか、「領受因の依処に依って観待因が施設される」と説かれている^⑧。

一方、『中辺分別論』では十能作(daśa-kāraṇa)が説かれている。すなわち、「生起能作、安住能作、任持能作、照了能作、変壊能作、分離能作、転変能作、信解能作、顕了能作、至得能作」である。

『大乘阿毘達磨集論』は、この『瑜伽論』の「十因」と『中辺分別論』の「十能作」とを合して、二十能作を説いたものと思われる^⑨。順序は『中辺分

別論』の十能作を「1~10」に当て、『瑜伽論』の十因を「11~20」に当てている。従って、『阿毘達磨集論』は『瑜伽論』より成立が後であることは当然であるが、『中辺分別論』よりも成立が後であると思う。なぜなら、『中辺分別論』では十能作は善等の十に関連して説かれているから、必然性があり、オリジナルと考えられるが、『阿毘達磨集論』では、単に『瑜伽論』の十因と『中辺分別論』の十能作を合して二十能作(kāraṇa)を説いたように思われるからである。

もし『阿毘達磨集論』が無着の作であるならば、『中辺分別論』の世親より後の成立の可能性が強い。(十能作と二十能作の関係から)。そうすると、『阿毘達磨集論』は無着の初期の作品ではないかといわれてきたが、この点がどうもあやしくなってくる。のみならず、十二有支と三雑染の関係から、『阿毘達磨集論』は『撰大乘論』よりも後の作品の可能性が強い^⑩。『撰大乘論』は無着の晩年に完成された作品であるといわれているので、そうすると、『阿毘達磨集論』は、それより後の無着の作品なのか。あるいは無着以後の人が無着造として作った作品ではないかとも考えられる。いずれにしても、重大な問題なので、ここですぐに結論が出るわけではないが、無着が初期唯識論書をすべて造ったとは考えにくいのではないだろうか。今後の大きな課題の一つであると思う。

最後に論書ではないが、『入楞伽經』も初期唯識論書と深くかかわっており、初期唯識思想の成立を考察する上に重要な資料であると思う。

『入楞伽經』の中、四卷楞伽といわれる『楞伽阿跋多羅宝經』は、求那跋陀羅が劉宋の元嘉二十年すなわち443年に訳出であるから、およそ350-400年頃の成立と考えられる^⑪。

『入楞伽經』には「五法、三性、八識、二無我」が説かれて(四卷楞伽にも説かれて)^⑫おり、特に八識が説かれているところから、世親以後の論書と

いわれていたが、世親の「釈軌論」の記述などから、世親は『入楞伽經』を知っていた、すなわちほぼ同時代の人と考えられる。

『瑜伽論』特に声聞地や菩薩地は、それ以前の成立であろうから、300年—350年頃の成立ではなかろうか。

なお、私は『中辺分別論』と『大乘莊嚴經論』との偈頌と長行との年代差を約50年位と考えているが、これらの点については、また別の機会に論じたいと思う。

まとめ

『大乘莊嚴經論』については、多くの学者の研究があり、私自身も「^{ニル}写本対照による大乘莊嚴經論の研究」(国書刊行会 昭和60年)を発売している。しかしながら、偈頌と長行を作った人は誰か、同一人物か否か、についてもまだ確定していない。

私は「弥勒の五部論」を中心に、最近、弥勒の五部論の中で、後世の作品ではないかと疑われている論書について検討しながら、弥勒の五部論の意義を考察した。中でも『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』は、中国伝にもチベット伝にも「弥勒の五部論」として数えられており、しかもいずれも梵蔵漢の三本が揃っているのが重要な論書であると思う。

今回、『大乘莊嚴經論』を『瑜伽論』や『中辺分別論』、更には『撰大乘論』を初めとする初期唯識論書と比較検討することにより、『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』との先後問題や『大乘阿毘達磨集論』との先後問題を少しでも明らかにできればと思った次第である。論書ではないが、『入楞伽經』の唯識思想との関連も重要であると思う。

この經の四卷楞伽は443年に訳出されたことが明らかであるので、唯識論書

の成立年代を決める上に重要な資料となるのではないかと思う。今回は時間切れとなったので、一応のまとめとしたが、もう一度改めてこれらの問題を整理して検討してみようと思う。

最後に『大乘莊嚴經論』のテキスト校訂であるが、すでに先の本を出版した後、第十一章、第十二章だけは校訂テキストを作っていたので、それに少し手を加えて、ここに第十一章のみを載せることにした。

写本については、私のいうNs本からNc本へ、Nc本からA本へ、NB本からNA本へ、Ns本からB本へ転写された^㊸ことが認められれば、Ns本とNc本それに大谷探検本のA本、B本だけでもよい^㊹が、今はなるべく多くの写本を示した方がよいかと思い、できるだけの資料を提示した。勿論、私のいうネパール写本の転写が一般に認められれば、今後は重要と思われる写本のみを表示にしたいと思っている。

注

- ① 『中辺分別論』の梵文題目については、山口益博士のチベット訳よりの還元梵語 Madhyāntavibhāga(tikā) や、山田竜城博士の Madhyāntavibhaṅga (梵語佛典の諸文献125頁)などがあったが、ラーフラ、サンクリトヤーヤナのチベットのシャル寺での梵本テキスト発見により、またそのテキスト出版(Nagao: Madhyāntavibhāga-[bhāṣya] 1964 や Tatia: Madhyānta-vibhāga-[bhāṣya] 1967)により、Madhyāntavibhāga に確定した。
- ② 早島理氏「菩薩道の哲学」—「大乘莊嚴經論」を中心として—(南都仏教第30号所収)昭和48年 3頁参照。
- ③ 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」(名古屋大学文学部研究論集 XV 1956) 33頁参照。
- ④ 宇井博士『大乘莊嚴經論研究』439頁参照。
- ⑤ 宇井博士「印度哲学研究」第一巻 377頁参照。「弥勒の本文と世親及安慧の釈とのみが伝わって居る故に頌と釈との作者については、何等の異説もない訳で、頌は確に弥勒造である」

- ⑥ 『国訳一切経』瑜伽部十三「辯中辺論解題」(昭和8年)
山口益博士「中辺分別論釈疏」序論29頁参照。
- ⑦ 山口博士「中辺分別論釈疏」序論29頁参照。
- ⑧ 同書 序論30頁参照。
- ⑨ 同書 序論30頁参照。
- ⑩ 山田竜城博士「梵語仏典の諸文献」125頁参照。
- ⑪ 同書 125頁参照。
- ⑫ 山田竜城博士「梵語仏典の諸文献」125頁では Madhyāntavibhāṅga とあるが、現在サンسكريット写本が見つかり、出版されているが、いずれも(Nagao 本も、Tatia 本も) Madhyāntavibhāṅgabhāṣya となっている。
- ⑬ このチベット訳 rnam par ḥbyed pa は、中辺分別論の vibhāṅga に相当するチベット訳と一致している。
- ⑭ 拙著「初期唯識思想の研究」(昭和51年)60頁参照。
- ⑮ 袴谷憲昭氏「チベットにおける唯識思想研究の問題」(「東洋学術研究」第21巻第2号)昭和57年 145頁参照。
- ⑯ 同上 151頁参照。
- ⑰ 拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」(仏教学セミナー第49号)10-11頁(抄説)参照。
- ⑱ 同上 13頁参照。
山口博士「弥勒造『法法性分別論管見』(常盤博士還暦記念 仏教論叢)55頁参照。
チベット訳34頁18行目(『山口博士還暦記念 印度学仏教学論叢』所収)
- ⑲ 拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」(仏教学セミナー第49号)13頁参照。
チベット訳17頁7行目(『山口博士還暦記念 印度学仏教学論叢』所収)
- ⑳ 袴谷憲昭氏「唯識文献における無分別智」(「駒沢大学仏教学部研究紀要」第43号 昭和60年)224頁参照。
- ㉑ 袴谷憲昭氏「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」(山口瑞鳳編『チベットの仏教と社会』昭和61年 258頁参照。
- ㉒ 勝呂博士「初期唯識思想の研究」186頁参照。
- ㉓ 『西藏大藏経』影印北京版29巻13-5-7参照。

- 高崎直道博士「瑜伽行派の形成」(講座 大乘仏教8)(取意)12頁参照。
拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」(仏教学セミナー第49号)4頁参照。
- ㉔ 高崎直道博士「瑜伽行派の形成」(講座 大乘仏教8)18頁参照。
拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」(仏教学セミナー第49号)5頁参照。
- ㉕ 高崎直道博士「瑜伽行派の形成」18頁参照。
拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」(仏教学セミナー第49号)5頁参照。
- ㉖ 拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」(仏教学セミナー第49号)6頁参照。
- ㉗ 松田和信氏「Nirvikalpapraveśa 再考—特に『法法性分別論』との関係について—」(印度学仏教学研究第45巻第1号)365頁参照。
- ㉘ 註㉔参照。
- ㉙ 註㉔参照。
- ㉚ 註㉑参照。
- ㉛ 山田竜城著「梵語仏典の諸文献」125頁参照。
宇井博士「宝性論研究」89頁参照。
- ㉜ 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」(名古屋大学文学部研究論集 XV)28頁参照。
- ㉝ 宇井博士「宝性論研究」(昭和34年)496頁参照。
- ㉞ 『大乘莊嚴經論』菩提品安慧釈、影印北京版108巻248-3-8。「仏位以後は十〔地〕に属する煩惱障と所知障との習気を残りなく断ずるから」(「仏教思想研究」第一号、5頁参照)。
拙稿「煩惱障所知障と人法二無我」(仏教学セミナー第1号)58頁、59頁参照。
- ㉟ 袴谷憲昭氏「チベットにおける唯識思想研究の問題」(「東洋学術研究」第21巻第2号)151頁参照。
- ㊱ 横山紘一氏「五思想よりみた弥勒の著作—特に『瑜伽論』の著者について—」(宗教学研究第45巻第1輯 208号 1971年)31頁参照。
- ㊲ 同論文 33頁参照。
- ㊳ 同論文 33頁参照。

- 39 向井亮氏「アサンガにおける大乘思想の形成と空観」(「宗教研究」第49巻第4輯、227号)1976年、参照。
- 40 U. Wogihara: Bodhisattvabhūmi I. p. 46, l. 11
- 41 U. Wogihara: Bodhisattvabhūmi I. p. 52, l. 13-l. 14
- 42 U. Wogihara: Bodhisattvabhūmi I. p. 135, l. 5
- 43 本論文3頁参照。
- 44 宇井博士「瑜伽論研究」44頁参照。
- 45 早島理氏「菩薩道の哲学—「大乘莊嚴經論」を中心として—」(南都仏教第30号)3頁参照。
- 46 勝呂信静博士「初期唯識思想の研究」332頁参照。
- 47 同書249頁参照。
- 48 同書250-291頁参照。
- 49 同書268頁参照。
- 50 本論文6頁参照。
- 51 S. Lévi: Mahāyānasūtrāṅkāra Tome 1. p. 140-p. 141.
yathoktaṃ madhyāntavibhāge
- 52 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」(名古屋大学文学部研究論集 XV、1956)23頁参照。
- 53 大正31、471 b、山口博士「漢藏対照弁中辺論」70頁参照。
- 54 Nagao: Madhyāntavibhāga-bhāṣya p. 50, l. 6
- 55 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」23頁参照。
- 56 S. Lévi: Mahāyānasūtrāṅkāra Tome 1. p. 7, l. 3
- 57 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」56頁参照。
- 58 同書56頁参照。
- 59 同書589頁参照。
- 60 十自在の所説について詳しくは拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」(印度学仏教学研究第26巻第1号)参照。
- 61 「撰大乘論」第十一彼果智分(玄奘訳)大正31、149中参照。
- 62 「大乘阿毘達磨集論」巻四(大正31、681中)参照。
- 63 「顯揚聖教論」巻八(大正31、517中)参照。
- 64 拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」(印度学仏教学研究第26巻

- 第1号)365頁参照。
- 65 同書365頁参照。(Lévi本、p. 66, l. 8-l. 12)
- 66 同書365頁参照。(Lévi本、p. 66, l. 14)
- 67 Nagao: Madhyāntavibhāga-bhāṣya p. 36, l. 1 参照。
山口博士「中辺分別論釈疏」156頁—157頁参照。
拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」(印度学仏教学研究第26巻第1号)365頁参照。
- 68 S. Lévi本、p. 65, l. 24参照。
拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」(印度学仏教学研究第26巻第1号)367頁参照。
- 69 本論文21頁参照。
- 70 高崎直道博士「入楞伽經の唯識説—Deha-bhoga-pratiṣṭhābham Vijñānam の用例をめぐる—」(「仏教学」創刊号)14頁参照。
- 71 拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」368頁参照。
- 72 拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」(印度学仏教学研究第26巻第1号昭52年)参照。
- 73 勝呂博士「初期唯識思想の研究」398頁参照。
- 74 同書399頁参照。
- 75 同書405頁参照。
- 76 同書414頁参照。
- 77 同書419頁参照。
- 78 同書420頁参照。
- 79 同書427頁参照。
- 80 拙稿「十能作と二十能作—初期唯識論書を中心として—」(印度学仏教学研究第28巻第1号)昭和54年、328頁参照。
- 81 同右331頁参照。
- 82 拙稿「『大乘阿毘達磨集論』と初期唯識論書との先後について—十二有支と三雜染との関係を中心として—」(仏教学セミナー第54号)昭和60年参照。
- 83 「国訳一切經」經集部七 解題63頁参照。
- 84 「世親と楞伽經との前後論について」(印度学仏教学研究第20巻第1号)324頁参照。

- ⑧5 「四卷楞伽」卷四、22a(偈頌)、21a参照。
 ⑧6 拙著「ネパール写本対照による 大乘莊嚴經論の研究」38頁参照。
 ⑧7 岩本明美氏「『大乘莊嚴經論』第十三章「修行章」—サンスクリットテキストと和訳—」(インドチベット学研究、第3号)57頁参照。

(平成11年10月2日脱稿)

MAHĀYĀNASŪTRĀLAMKĀRA

XI (dharma-paryeṣṭy-adhikāraḥ)

(Ns 44a)

L.53

[Nc 37a] dharma-paryeṣṭy-adhikāre ālambana-paryeṣṭau catvāraḥ Ba.55
 ślokaḥ |

**piṭaka-trayaṃ dvayaṃ vā saṃgrahataḥ kāraṇair navabhir
 iṣṭaṃ |**

vāsana-bodhana-śamana-prativedhais tad vimocayati || XI. 1

(Ns 44b) piṭaka-trayaṃ sūtra-vinayābhidharmāḥ|

tad eva trayaṃ hinayānāgrayāna-bhedena dvayaṃ bhavati | śrāvaka-
 piṭakaṃ bodhisatva-piṭakaṃ ca | tat punas trayaṃ dvayaṃ vā kenār-
 thena piṭakam ity āha | saṃgrahataḥ sarvajñeyārtha-saṃgrahād
 veditavyaṃ | kena kāraṇena trayaṃ | navabhiḥ kāraṇair vicikitsā-
 pratipakṣeṇa sūtraṃ yo yatrārthe saṃśayitas tasya tan-niścayārthaṃ
 deśanāt | anta-dvayānuyoga-pratipakṣeṇa vinayaḥ sāvadya-paribhoga-
 pratiśedhataḥ kāma-sukhallikānuyogāntasyānavadya-paribhogānujñānata
 ātma-klamathānuyogāntasya | svayaṃ dṛṣṭi-parāmarṣa-pratipakṣeṇābhi-
 dharmo 'viparita-dharma-lakṣaṇābhidyotanāt |

punaḥ śikṣā-traya-deśanā sūtreṇa adhiśilādhicitta-saṃpādanatā L.54
 vinayena śilavato 'vipratīśārādi-krameṇa¹⁾ samādhilābhāt | adhiprajñā-
 saṃpādanābhidharmenāvīparītārtha-pravicayāt | punar dharmārtha-
 deśanā sūtreṇa | dharmārtha-niṣpattir vinayena kleśa-vinaya-saṃyukta-
 sya tayoḥ prativedhāt | dharmārtha-sāṃkathya[Nc 37b]-viniścaya-kauśa-
 lyam abhidharmenēti |

ebhiḥ navabhiḥ kāraṇaiḥ piṭaka-trayaṃ iṣṭaṃ | tac ca saṃsārād
 vimocanārthaṃ | kathaṃ punas tad vimocayati | vāsana-bodhana-
 śamana-prativedhais ta(Ns 45a)d vimocayati | śrutena citta-vāsanaṭaḥ |

cintayā bodhanataḥ | bhāvanayā śamathena śamanataḥ | vipaśyanayā
prativedhataḥ |

sūtrābhidharma-vinayās catur-vidhārthā matāḥ samāsenā |

teṣāṃ jñānād dhimān sarvākāra-jñatām eti || XI. 2

te ca sūtra-vinayābhidharmāḥ pratyekaṃ catur-vidhārthāḥ samāsatas
teṣāṃ jñānād bodhisatvaḥ sarva-jñatām prāpnoti | śrāvakas tv ekasyā api
gāthāyā artham ajñāyāsrava-kṣayaṃ prāpnoti |

āśrayato lakṣaṇato dharmād arthāc ca sūcanāt sūtram |

abhimukhato 'thābhikṣṇyād abhibhava-gatito 'bhidharmaś ca ||

XI. 3

Ba.56 katham pratyekaṃ catur-²⁾vidhārthāḥ | āśraya-lakṣaṇa-dharmārtha-sūca-
nāt sūtram | tatrāśrayo yatra deśe deśitam yena yasmai ca | lakṣaṇam
saṃvṛti-satya-lakṣaṇam paramārtha-satya-lakṣaṇam ca | dharmāḥ
skandhāyatana-dhātṽ-āhāra-pratitya-samutpādayaḥ | artho 'nusaṃdhiḥ |
abhimukhatvād abhikṣṇatvād abhibhavanād abhigamanaḥ cābhidhar-
mo veditavyaḥ | nirvāṇābhimukho dharmo 'bhidharmaḥ satya-bodhi-
pakṣa-vimokṣamukhādi-deśanāt | abhikṣṇam dharmo 'bhidharma ekāi-
kasya dharmasya rūpya-rūpi-sanidarśanādi-prabhedena bahula-nirdeśāt |
abhibhavatīty abhidharmaḥ parapravādābhibhavanād vivādādhi-
karaṇādibhiḥ |

(Ns 45b) abhigamyate sūtrārtha etenēty a(Ns 37a)bhidharmaḥ |

āpatter utthānād vyutthānān niḥsrteś ca vinayatvaṃ |

pudgalataḥ prajñapteḥ pravibhāga-viniścayāc cāiva || XI. 4

L.55 āpattitaḥ samutthānato vyutthānato niḥsaraṇataś ca veditavyaḥ |
tatrāpattiḥ pañcāpatti-nikāyāḥ | samutthānam āpattinām ajñānāt pra-
mādāt kleśa-prācuryād anādarāc ca | vyutthānam āśayato na daṇḍa-
karmataḥ | niḥsaraṇam sapta-vidham | pratideśanā | abhyupagamaḥ
śikṣā-dattakādinām daṇḍa-³⁾karmanām ⁴⁾samavaghātaḥ prajñapte śikṣāpade
punaḥ paryāyeṇā⁵⁾nujñānāt prasrabdhiḥ samagreṇa samghena śikṣā-

padasya pratiprasrambhaṇāt | āśraya-parivṛttir bhikṣu-bhikṣuṇyoḥ strī-
puruṣa-vyañjana-parivartanād asādhāraṇā ⁶⁾ced āpattiḥ | bhūta-praty-
avekṣā dharmōddānākāraih⁷⁾ pratyavekṣā-viśeṣaḥ | dharmatā-prati-
lambhaś ca satya-darśanena kṣudrānuḥkṣudrāpatty-abhāve⁸⁾ dharmatā-prati-
lambhāt | punaś catur-vidhenārthena vinayo veditavyaḥ | pudgalato yam
āgamyā śikṣā prajñapyate | prajñaptito ¹⁰⁾yadārocite pudgalāparādhe śāstā
saṃnipātya ¹¹⁾saṃgham śikṣām prajñāpayati | pravibhāgato yaḥ pra-
jñapte śikṣāpade tad-uddeśasya vibhāgaḥ | viniścayataś ca tatrāpattiḥ
katham bhava(Ns 46a)ty anāpattir vēti nirdhāraṇāt |

ālambana-lābha-paryeṣtau trayāḥ ślokāḥ |

ālambanam mato dharmāḥ adhyātmaṃ bāhyakaṃ dvayaṃ¹²⁾ |

lābho dvayor dvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ¹³⁾ || XI. 5

dharmālambanam yo deśitaḥ kāyādikam cādhyātmikam¹⁴⁾ bāhyam ādhyātmī-
ka-bāhyañ¹⁵⁾ ca | tatra grāhaka-bhūtam kāyādikam ādhyātmikam grāhya-
bhūtam bāhyam tasyo(Nc 38b)r eva tathatā-dvayaṃ | tatra dvayor
ādhyātmika-bāhyayor ālambanayor dvayārthena lābho yathā-kramaṃ |
yadi grāhyārthād grāhakārtham abhinnaṃ paśyati grāhakārthāc ca
grāhyārtham dvayasya punaḥ samastasyādhyātmika-bāhyālambanasya
tathatāyā lābhas tayor eva dvayor anupalambhād veditavyaḥ |

manojalpair yathōktārtha-prasannasya pradhāraṇāt |

Ba.57

artha-khyānasya jalpāc ca nāmni sthānāc ca cetasaḥ || XI. 6

dharmālambana-lābhaḥ syāt tribhir jñānaih śrutādibhiḥ |

L.56

trividhālambana-lābhaś ca pūrvōktas tat-samāśritaḥ || XI. 7

dharmālambana-lābhaḥ punar tribhir jñānair bhavati śruta-cintā-
bhāvanā-mayaḥ | tatra samāhitena cetasā manojalpair yathōktārtha-
prasannasya tat-pradhāraṇāt śruta-mayena jñānena tal-lābhaḥ¹⁷⁾ | mano-
jalpair iti saṃkalpaiḥ | prasannasyēty adhi(Ns 46b)muktasya niścitasya |
pradhāraṇād iti pravicyāt | jalpād artha-khyānasya pradhāraṇāc cintā-
mayena tal-lābhaḥ | yadi manojalpād evāyam arthaḥ khyātīti paśyati

nānyan manojalpād yathoktaṃ dvayāmbana-lābhe | cittasya nāmi
sthānāt bhāvanā-mayena jñānena tal-lābho veditavyo dvayānupalambhād
yathōktaṃ dvayāmbana-lābhe | ata eva ca sa pūrvōktas trividhālam-
bana-lābho dharmāmbana-lābha-saṃnīśrito veditavyaḥ |
manasikāra-paryeṣṭau pañca ślokāḥ |

tri-dhātukaḥ kṛtya-karaḥ sasambādhasrayo 'paraḥ |
adhimukti-niveśi ca tivra-cchanda-karo 'paraḥ || XI. 8
hīna-pūrṇāśrayo dvedhā sajalpo 'jalpa eva ca |
jñānena sampra(Nc 39a)yuktaś ca yogōpaniśad ātmakaḥ || XI. 9
saṃbhinnāmbanaś cāsau vibhinnāmbanaḥ sa ca |
pañcadhā saptādhā cāiva pariñā pañcadhā 'sya ca || XI. 10
catvāraḥ sapta triṃśac ca ākāra bhāvanāgatāḥ |
mārga-dvaya-svabhāvo 'sau dvy-anuśaṃsaḥ praticchakaḥ || XI.
11

prayogī vaśa-vartī ca paritto vipulātmakaḥ |
yogināḥ hi manaskāra eṣa sarvātmako mataḥ || XI. 12

aṣṭādaśa-vidho yoga-manaskāraḥ | dhātu-niyataḥ kṛtya-kara āsraya-
vibhakto 'dhimukti-niveśakaś cchanda-janakaḥ samādhi-saṃnīśrito (Ns
47a) jñāna-saṃprayuktaḥ saṃbhinnāmbano vibhinnāmbanaḥ pariñā-
niyato bhāvanākāra-praviṣṭaḥ śamatha-vipaśyanā-mārga-svabhāvo
'nuśaṃsa-manaskāraḥ praticchakaḥ prāyogika-manaskāro vaśa-varti-
manaskāraḥ paritta-manaskāro vipula-manaskāraś ca | tatra dhātu-
niyato yaḥ śrāvakādi-gotra-niyataḥ | kṛtya-karo yaḥ saṃbhṛta-saṃ-
bhārasya | āsraya-vibhakto yaḥ sasambādha-gr̥hasthāśrayo 'sambādha-
pravrajitāśrayaś ca | adhimukti-niveśako yo buddhānusmṛti-sahagataḥ |
cchanda-janako yas-tat-saṃpratyaya-sahagataḥ samādhi-saṃnīśrito yah
samantaka-maula-samādhi-sahagataḥ savitarka-savicārā²⁰⁾
mātrāvitarkāvicāra-sahagataś ca | jñāna-saṃprayukto yo yogōpaniśad-
yoga-sahagataḥ sa punar yathā-kramam śruta-cintā-mayo bhāvanā-mayaś

ca | saṃbhinnāmbanaḥ pañca-vidhaḥ sūtrōddāna-gāthā-nipāta-yāvad-
udgr̥hīta-yāvad-deśitāmbanaḥ | vibhinnālam(Nc 39b)baṇaḥ sapta-vidho
nāmāmbanaḥ padāmbano vyañjanāmbanaḥ pudgala-nair-
ātmyāmbano dharmā-nairātmyāmbano rūpi-dharmāmbano 'rūpi-
dharmāmbanaś ca | tatra rūpi-dharmāmbano yaḥ kāyāmbanaḥ |
arūpi-dharmāmbano yo vedanā(Ns 47b)-citta-dharmāmbanaḥ | pari-
ñā-niyato yaḥ pariñēye vastuni pariñēye 'rthe pariñāyāṃ pariñā-
phale tat-pravedanāyāṃ ca | tatra pariñēyaṃ vastu duḥkhaṃ pariñēyo
'rthas tasyāivānitya-duḥkha-śūnyānātmata | pariñā mārgaḥ | pariñā-
phalaṃ vimuktiḥ tat-pravedanā vimukti-jñāna-darśanaṃ | bhāvanākāra-
praviṣṭaś catur-ākāra-bhāvanaḥ sapta-triṃśad-ākāra-bhāvanaś ca | tatra
catur-ākāra-bhāvanaḥ pudgala-nairātmyākāra-bhāvano dharmā-nair-
ātmyākāra-bhāvano darśanākāra-bhāvano jñānākāra-bhāvanaś ca | tatra
sapta-triṃśad-ākāra-bhāvanaḥ | aśubhākāra-bhāvano duḥkhākāra-
bhāvano 'nityākāra-bhāvano 'nātmākāra-bhāvanaḥ smṛty-upasthāneṣu |
pratilambhākāra-bhāvano nisevanākāra-bhāvano vinirdhāvanākāra-
bhāvanaḥ pratipakṣākāra-bhāvanaḥ samyak-prahāneṣu | saṃtuṣṭi-
prātipakṣika-manaskāra-bhāvano yadā cchandaṃ janayati | vikṣepa-
saṃśaya-prātipakṣika-manaskāra-bhāvano yadā vyāyacchate vīryam
ā(Nc 40a)rabhate yathā-kramam | auddhatya-prātipakṣika-samādhy-
ākāra-bhāvano yadā cittaṃ *pragr̥hnāti*²²⁾ | laya-prātipakṣika-samādhy-
ākāra-bhāvano yadā cittaṃ *pradadhāti*²³⁾ | ete yathā-kramam ca(Ns 48a)-
turṣu ṛddhi-pādeṣu veditavyaḥ | sthita-cittasya lokottara-saṃpatti-saṃ-
pratyayākāra-bhāvano yathā saṃpratyayākāra-bhāvana evaṃ vyava-
sāyākāra-bhāvano dharmāsaṃpramoṣākāra-bhāvanaś citta-sthity-ākāra-
bhāvanaḥ pravicyayākāra-bhāvana indriyeṣu | eta eva pañca nirlikhita-
vipakṣa-manaskārā baleṣu | saṃbodhi-saṃprakhyānākāra-bhāvanas
tatrāiva vicayōtsāha-saumanasya-karmaṇyatā-citta-sthiti-samatākāra-
bhāvanaḥ sapta-saṃbodhy-aṅgeṣu | prāpti-niścayākāra-bhāvanaḥ pari-

karma-bhūmi-²⁴⁾samlakṣaṇā kāra-bhāvanaḥ para-samprāpty-ākāra-bhāvana
 ārya-kānta-śila-praviṣṭākāra-bhāvanaḥ samlikhita-vṛtti-samudācār²⁵⁾ākāra-
 bhāvanaḥ pūrva-paribhāvita-pratilabdha-mārgābhyaśākāra-bhāvano
 dharma-sthiti-nimittasampramoṣākāra-bhāvano 'nimitta-citta-sthity-²⁶⁾āśraya-
 parivṛtṭy-ākāra-bhāvanaś ca mārgāṅgeṣu | śamatha-vipaśyanā-bhāvanā-
 mārga-svabhāvayor na kaścin nirdeśaḥ | anuśaṃsa-manaskāro-dvididho
 L.58 dauṣṭhulyāpakarṣaṇo dṛṣṭi-nimittāpakarṣaṇaś ca | praticchako yo
 dharma-²⁷⁾śrotasī buddha-bodhisatvānām antikād avavāda-grāha(Ns 48b)-
 kaḥ | prāyogika-manaskāraḥ pañcavidhaḥ samādhi-gocare | samkhyōpa-
 lakṣa(Nc 40b)ṇa-prāyogiko yena sūtrādiṣu nāma-pada-vyañjana-sam-
 Ba.59 khyām upalakṣayate | vṛtṭy-uplakṣaṇa-prāyogiko yena dvididhām vṛttim
 upalakṣayate parimāṇa-vṛttim ca vyañjanānām aparimāṇa-vṛttim ca
 nāma-padayoḥ | parikalpōpalakṣaṇa-prāyogiko yena dvayam upādāya
 dvaya-parikalpam upalakṣayate nāma-parikalpam upādāyārtha-pari-
 kalpam artha-parikalpam upādāya nāma-parikalpam aparikalpam akṣa-
 ram | kramōpalakṣaṇa-prāyogiko yena nāma-grahaṇa pūrvakām artha-
 grahaṇa-pravṛttim upalakṣayate | prativedha-prāyogikaś ca | sa punar
 ekādaśa-vidho veditavya āgantukatva prativedhataḥ samprakhyāna-
 nimitta-prativedhato 'rthānupalambha-prativedhata upalambhānupa-
 lambha-prativedhato dharma-dhātu-prativedhataḥ pudgala-nairātmya-
 prativedhato dharma-nairātmya-prativedhato hināśaya-prativedhata
 udāra-māhātmyāśaya-prativedhato yathādhigama-dharma-vyavasthāna-
 prativedhato vyavasthāpita-dharma-prativedhataś ca | vaśavarti-
 manaskāras trividhaḥ kleśāvaraṇa-suviśuddhaḥ kleśa-jñeyāvaraṇa-su-
 viśuddho guṇābhinirhāra-suviśuddhaś ca |

dharma-tatvārtha²⁹⁾-paryeṣṭau dvau ślo(Ns 49a)kau |

**tatvaṃ yat satataṃ dvayena rahitaṃ bhrānteś ca samñisrayaḥ
 śakyaṃ nāiva ca sarvathābhilapitum yac cāprapañcātmaṃ
 jñeyaṃ heyam atho viśodhyam amalā yac ca prakṛtyā mataṃ**

yasyākāśa-suvarṇa-vāri-sadrṣī kleśād viśuddhir matā || XI. 13

satataṃ dvayena rahitaṃ tatvaṃ parikalpitaḥ svabhāvo grāhya-grāhaka-
 lakṣaṇenātyantam a(Nc 41a)-satvāt | bhrānteḥ samñisrayaḥ paratantras
 tena tat-parikalpanāt | anabhilāpyam aprapañcātmaṃ ca pariniṣpan-
 naḥ svabhāvaḥ | tatra prathamam tatvaṃ pariñjeyam dvitīyam praheyam
 ṛtīyam viśodhyam cāgantuka-malād viśuddham ca prakṛtyā yasya pra-
 kṛtyā viśuddhasyākāśa-suvarṇa-vāri-sadrṣī kleśād viśuddhiḥ | na hy
 ākāśādini prakṛtyā aśuddhāni | na cāgantuka-malāpagamād eṣaṃ viśud-
 dhir neṣyata iti |

na khalu jagati tasmād vidyate kiṃcid anyaj

jagad api tad aśeṣam tatra sammuḍha-buddhi |

katham ayam abhirūḍho loka-moha-prakāro

yad asad abhiniviṣṭaḥ sat samantād vihāya || XI. 14

na khalu tasmād evam lakṣaṇād dharma-dhātoḥ kiṃcid anyal loke L.59
 vidyate dharmatāyā dharmasyā³¹⁾bhinnavāt | śeṣam gatārtham |

tatve māyōpama-paryeṣṭau pañca-daśa ślokaḥ |

yathā māyā tathā-bhūta-parikalpo nirucyate |

ya(Ns 49b)thā māyā-kṛtam tadvat dvaya-bhrāntir nirucyate ||

XI. 15

yathā māyā³²⁾-mantra-parigrhītaṃ bhrānti-nimittaṃ kāṣṭha-loṣṭādikaṃ Ba.60
 tathā-bhūta-parikalpaḥ paratantraḥ svabhāvākāro³³⁾ veditavyaḥ | yathā
 māyā-kṛtam tasyāṃ māyāyāṃ hasty-aśva-suvarṇādy-ākṛtis tad-bhāvena
 pratibhāsītā tathā tasminn abhūta-parikalpe dvaya-bhrāntir grāhya-
 grāhakatvena pratibhāsītā parikalpita-svabhāvākārā veditavyā

yathā tasmin na tad-bhāvaḥ paramārthas tathēṣyate

yathā tasyōpalabbhis tu tathā samvṛti satyatā || XI. 16

yathā tasmin na tad-bhāvo māyā-kṛte hastivādy-abhāvas tathā tasmin
 paratantre paramārtha iṣyate parikalpitasya dvaya-lakṣaṇasyābhāvaḥ |
 yathā tasya māyā-kṛtasya hasty-ādi-bhāvenōpalabdhis tathā-(Nc 41b)

bhūta-parikalpasya samvṛti-satyatōpalabdhiḥ |

tad-abhāve yathā vyaktis tan-nimittasya labhyate |

tathāśraya-parāvṛttāv asat-kalpasya labhyate || XI. 17

yathā māyā-kṛtasyābhāve tasya nimittasya kāṣṭhādikasya vyaktir
bhūtārthōpalabhyate tathāśraya-parāvṛttau dvaya-bhrānty-abhāvād
abhūta-parikalpasya bhūto 'rtha upalabhyate |

tan-nimitte yathā loko hy abhrāntaḥ kāmataś caret |

parāvṛttāv aparyastaḥ kāmācāri tathā yatīḥ || XI. 18

yathā tan-nimitte (Ns 50a) kāṣṭhādāv abhrānto lokaḥ kāmataś carati
svatantras tathā āśraya-parāvṛttāv aparyasya āryaḥ kāma-cāri bhavati
svatantraḥ |

tad-ākṛtiś ca tatrāsti tad-bhāvaś ca na vidyate |

tasmād astitva-nāstitvaṃ māyādiṣu vidhiyate || XI. 19

L.60 eṣa śloko gatārthaḥ |

na bhāvas tatra cābhāvo nābhāvo bhāva eva ca

bhāvābhāvāviśeṣaś ca māyādiṣu vidhiyate || XI. 20

na bhāvas tatra cābhāvo yas tad-ākṛta-bhāvo nāsau na bhāvaḥ | nābhāvo
bhāva eva ca yo hastitvādy-abhāvo nāsau bhāvaḥ tayoś ca bhāvābhāvayor
aviśeṣo māyādiṣu vidhiyate | ya eva hi tatra tad-ākṛti-bhāvaḥ | sa eva
hastitvādy-abhāvaḥ | ya eva hastitvādy-abhāvaḥ sa eva tad-ākṛti-bhāvaḥ |

Ba.61

tathā dvayābhatātrāsti tad-bhāvaś ca na vidyate |

tasmād astitva-nāstitvaṃ rūpādiṣu vidhiyate || XI. 21

tathā 'trābhūta-parikalpe dvayābhāsatāsti dvaya-bhāvaś ca nāsti | tas-
mād astitva-nāstitvaṃ rūpādiṣu vidhiyate 'bhūta-parikalpa-svabhāveṣu |

na bhāvas tatra cābhāvo nābhāvo bhāva eva ca |

[Nc 42a]bhāvābhāvāviśeṣaś ca rūpādiṣu vidhiyate || XI. 22

na bhāvas tatra cābhāvaḥ | yā dvayābhāsatā | nābhāvo bhāva eva ca | yā
dvayatā nāstitā | bhāvābhāvāviśeṣaś ca rūpādiṣu vidhiyate || ya eva hi (Ns
50b) dvayābhāsatāyā bhāvaḥ sa eva dvayasyābhāva iti |

⁴⁰⁾
samāropāpavādānta pratiṣedhārtham iṣyate |

hinayānena yānasya pratiṣedhārtham eva ca || XI. 23

kim arthaṃ punar ayaṃ bhāvābhāvayor aikāntikatvam aviśeṣaś cēṣyate
| yathā-kramaṃ | samāropāpavādānta-pratiṣedhārtham iṣyate | hinayāna-
gamana-pratiṣedhārtham ca | abhāvasya hy abhāvatvaṃ viditvā samāro-
paṃ na karoti | bhāvasya bhāvatvaṃ viditvāpavādaṃ na karoti | tayoś
cāviśeṣaṃ viditvā na bhāvād udvijate tasmān na hinayānena niriyati |

bhrānter nimittaṃ bhrāntiś ca rūpa-vijñaptir iṣyate |

arūpiṇi ca vijñaptir abhāvāt syān na cetarā || XI. 24

rūpa-bhrānter yā nimitta-vijñaptiḥ sā rūpa-vijñaptir iṣyate rūpākhyā | sā L.61
tu rūpa-bhrāntir arūpiṇi vijñaptiḥ | abhāvād rūpa-vijñapter itarāpi na syād
arūpiṇi vijñaptiḥ | kāraṇābhāvāt |

māyā-hasty-ākṛti-grāha-bhrānter dvayam udāhṛtaṃ

dvayaṃ tatra yathā nāsti dvayaṃ cāivōpalabhyate || XI. 25

bimba-saṃkalikā-grāha-bhrānter dvayam udāhṛtaṃ |

dvayaṃ tatra yathā nāsti dvayaṃ cāivōpalabhyate || XI. 26

māyā-hasty-ākṛti-grāha-bhrāntito dvayam udāhṛtaṃ | grāhyaṃ (Ns 51a)
grāhakaṃ ca tatra yathā nāsti dvayaṃ cāivōpalabhyate | pratibimba-
saṃkalikā ca manasikurvataḥ tad-grāha-bhrā(Nc 42b)nter dvayam udā-
hṛtaṃ pūrvavat |

tathā bhāvāt tathā 'bhāvād bhāvābhāvāviśeṣataḥ

Ba.62

sad-asanto 'tha māyābhā ye dharmā bhrānti-lakṣaṇāḥ || XI. 27

ye dharmā bhrānti-lakṣaṇā vipakṣa-svabhāvas te sad-asanto māyōpamāś
ca | kiṃ kāraṇaṃ | santas tathā bhāvād abhūta-parikalpatvena | asantas
tathā 'bhāvāt grāhya-grāhakatvena | tayoś ca bhāvābhāvayor aviśiṣṭa-
tvāt santo 'py asanto 'pi māyāpi cāivaṃ lakṣaṇā | tasmān māyōpamāḥ |

tathā 'bhāvāt tathā 'bhāvāt tathā 'bhāvād alakṣaṇāḥ ||

māyōpamāś ca nirdiṣṭā ye dharmāḥ prātipakṣikāḥ || XI. 28

ye 'pi prātipakṣikā dharmā buddhenōpadiṣṭāḥ smṛty-upasthānādayas te 'py

alākṣaṇā māyās ca nirdiṣṭāḥ | kiṃ kāraṇaṃ tathā 'bhāvād yathā bālair
gr̥hyante | tathā 'bhāvād yathā deśitāḥ | tathā 'bhāvād yathā saṃdarśitā
buddhena garbhāvakraṃṣā-janmābhiniṣkraṃṣābhisaṃbodhy-ādayaḥ |
evaṃ alākṣaṇā avidyamānās ca khyānti tasmān māyōpamāḥ |

māyā-rājēva cānyena māyā-rājñā parājitaḥ |

ye sarva-dharmān paśyanti ⁵²⁾nirmānās ⁵³⁾te jinātmajāḥ || XI. 29

L.62 ye prātipakṣikā dharmās te māyā-rāja-sthānīyāḥ saṃkleśa-prahāṇe
vyavadānādhipatyāt | ye 'pi saṃkleśikā dharmās te 'pi rāja-sthānīyāḥ
saṃkleśa-nirvṛttāy ādhipatyāt | atas taiḥ prātipakṣikaiḥ saṃkleśa-parā-
jaya māyā-rājñēva rājñāḥ parājayo draṣṭavyaḥ | taj-jñānāc ca bodhisatvā
⁵⁴⁾nirmānā bhavanti ubhaya-pakṣe |

aupamyārthe [Nc 43a] ślokaḥ |

māyā-svapna-marīci-bimba-sadṛśāḥ prodbhāsa-śrutkōpamā

vijñeyōdaka-candra-bimba-sadṛśā nirmāṇa-tulyāḥ punaḥ |

ṣaṭ ṣaṭ dvau ca punaś ca ṣaṭ dvaya-matā ekāikaśaś ca trayāḥ

saṃskārāḥ khalu tatra tatra kathitā buddhair vibuddhōttamāiḥ ||

XI. 30

yat tūktaṃ bhagavatā māyōpamā dharmā yāvan nirmāṇōpamā iti | tatra
māyōpamā dharmāḥ ṣaḍ-ādhyātmikāny āyatanāni | asaty ātma-jīvādi-
tve tathā prakhyānāt | svapnōpamāḥ ṣaṭ bāhyāny āyatanāni tad-
upabhogasyāvastukatvāt | marīcikōpamāu dvau dharmāu cittam caitasi-
kāś ca bhrānti-karatvāt | pratibimbōpamāḥ punaḥ ṣaḍ evādhyātmikāny
āyatanāni pūrva-karma-pratibimbatvāt | pratibhāsōpamāḥ ṣaḍ eva bā-
hyāny āyatanāny ādhyātmikānām āyatanānām (Ns 52a) chāyā-bhūtatvāt

Ba.63 tad-ādhipatyōtpattitāḥ | ṣaṭ dvayaṃ matāḥ ṣaṭ dvayamatāḥ | pratiśrut-
kōpamā deśanā-dharmāḥ | udaka-candra-bimbōpamāḥ samādhi-
saṃniśritā dharmāḥ samādher udaka-sthānīyatvād acchatayā | nir-
māṇōpamāḥ saṃcintya-bhavōpapatti-parigrahe 'saṃkliṣṭa-sarva-kriyā-
prayogavāt |

jñeya-paryeṣṭau ślokaḥ |

abhūta-kalpo na bhūto nābhūto 'kalpa eva ca |

na kalpo nāpi cākalpaḥ sarvaṃ jñeyaṃ nirucyate || XI. 31

abhūta-kalpo yo na lokottara-jñānānukūlaḥ kalpaḥ | na bhūto nābhūto
yas tad-anukūlo yāvan nirvedha-bhāgiyaḥ | akalpas tathatā lokottaram
ca jñānaṃ | na kalpo nāpi cākalpo lokottara-prṣṭha-[Nc 43b]labdham L.63
laukikaṃ ⁵⁶⁾jñānaṃ | etāvaca sarvaṃ jñeyaṃ |

saṃkleśa-vyavadāna-paryeṣṭau śloka-dvayaṃ |

svadhātuto dvayābhāsāḥ sāvidhyā-kleśa-vṛttayaḥ |

vikalpāḥ saṃpravartante dvaya-dravya-vivarjitāḥ || XI. 32

svadhātuta iti ⁵⁷⁾svabijād ālaya-vijñānataḥ | dvayābhāsā iti grāhya-
grāhakaḥbhāsāḥ | sahvāvidyayā kleśaiś ca vṛttir eṣāṃ ta ime sāvidyā-kleśa-
vṛttayaḥ | dvaya-dravya-vivarjitā iti (Ns 52b) grāhya-dravyeṇa grāhaka-
dravyeṇa ca | evaṃ kleśāḥ paryeṣitavyaḥ |

ālambana-viśeṣāptiḥ svadhātu-sthāna-yogataḥ |

ta eva hy advayābhāsā vartantē carma-kāṇḍavat || XI. 33

ālambana-viśeṣāptir iti yo dharmā lambana-lābhaḥ pūrvaṃ uktaḥ |
svadhātu-sthāna-yogata iti svadhātur vikalpānām tathatā tatra sthānaṃ
nāmnī sthānāc cetasaḥ | yogata ity abhyāsāt bhāvanā-mārgēṇa | ta eva
vikalpā advayābhāsā vartante parāvṛttāśrayasya carmavat kāṇḍavac
ca | yathā hi kharatvāpagamāt tad eva carma mṛdu bhavati | agni
saṃtāpanayā tad eva kāṇḍam ṛju bhavati | evaṃ śamatha-vipaśyanā-
bhāvanābhyāṃ cetāḥ-prajñā-vimukti-lābhe parāvṛttāśrayasya ta eva
vikalpā na punar dvayābhāsāḥ pravartante | ity ⁵⁸⁾evaṃ vyavadānaṃ
paryeṣitavyaṃ |

vijñaptimātratā-paryeṣṭau dvau ślokau

cittam dvaya-prabhāsam rāgādy-ābhāsam iṣyate tadvat |

śraddhādy-ābhāsam vā na tu dharmāḥ kliṣṭa-kuśalo 'sti || XI. 34

cittamātram eva dvaya-pratibhāsam iṣyate grāhya-pratibhāsam grāhaka- Ba.64

pratibhāsaṃ ca | [Nc 44a] tathā rāgādi-kleśābhāsaṃ tad evēṣyate
śrad(Ns 53a)dhādi-kuśala-dharmābhāsaṃ vā | na tu tad-ābhāsād anyah
kliṣṭo dharmo 'sti rāgādi rāgādi-lakṣaṇaḥ kuśalo vā śraddhādi-lakṣaṇaḥ |
yathā dvaya-pratibhāsād anyo na dvaya-lakṣaṇa itī⁶¹⁾

cittam citrābhāsaṃ citrākāraṃ pravartate tacca |⁶²⁾

bhāso bhāvābhāvo na tu dharmāṇāṃ atas tatra || XI. 35⁶³⁾

L.64 cittam eva svataś⁶⁵⁾ citrābhābhāsaṃ pravartate | paryāyeṇa rāgābhāsaṃ
vā dveṣābhāsaṃ vā tad-anya-dharmābhāsaṃ vā | citrākāraṃ ca yugapat
śraddhādy-ākāraṃ | bhāso bhāvābhāvah kliṣṭa-kuśalāvasthe cetasi | na tu
dharmāṇāṃ kliṣṭāṇāṃ kuśalāṇāṃ vā⁶⁶⁾ tat-pratibhāsa-vyatirekeṇa tal-
lakṣaṇābhāvāt

lakṣaṇa-paryeṣṭau ślokā aṣṭau | ekenōddeśaḥ śeṣair nirdeśaḥ |

lakṣyaṃ ca lakṣaṇaṃ cāiva lakṣaṇā ca prabhedataḥ |

anugrahārthaṃ satvānāṃ sambuddhaiḥ saṃprakāśitāḥ || XI. 36

anenōddeśaḥ |

sadrṣṭikam ca yac cittam tatrāvasthāvīkārītā |

lakṣyam etat samāsenā hy apramāṇaṃ prabhedataḥ || XI. 37

tatra cittam vijñānaṃ rūpaṃ ca | drṣṭiś caitasikā dharmāḥ | tatrāvasthā
citta-viprayuktā dharmāḥ | avīkārītā asaṃskṛtam akāśādīkaṃ tad-
vijñapter nityaṃ tathā-pravṛtṭeḥ | ity etat samāsenā pañca-vidhaṃ lak-
ṣyaṃ prabhedanāpramāṇaṃ |

yathā-jalpārtha-saṃjñā(Ns 53b)yā nimittam tasya vāsanā |

tasmād apy arthā⁶⁷⁾-vikhyānaṃ parikalpita-lakṣaṇaṃ || XI. 38

lakṣaṇaṃ samāsenā trividhaṃ parikalpitādi-lakṣaṇaṃ | tatra parikalpita-
lakṣaṇaṃ trividhaṃ yathā-jalpārtha-saṃjñāyā nimittam tasya⁶⁸⁾ ca
jalpasya vāsanā tasmāc ca vāsanād yo 'rthaḥ khyāti avyavahāra-
kuśalānāṃ vināpi yathā[Nc 44b]-jalpārtha-saṃjñāyā | tatra yathā
'bhilāpam artha-saṃjñā caitasikī yathā-jalpārtha-saṃjñā | tasyā yad⁶⁹⁾
ālambanaṃ tan nimittam | evaṃ yac ca parikalpyate yataś ca kāraṇād

vāsanatas tad-ubhayaṃ parikalpita-lakṣaṇaṃ atrābhipretam

yathā-nāmārtham arthasya nāmnaḥ prakhyānatā ca yā |⁷⁰⁾

asat-kalpa-nimittam hi parikalpita-lakṣaṇaṃ || XI. 39

apara-paryāyo yathā nāma cārthaś ca yathā-nāmārtham arthasya nām- Ba.65
naś ca prakhyānatā yathā-nāmārtha prakhyānatā | yadi yathā-nāmārthaḥ
khyāti yathārthaṃ vā nāma ity etad abhūta-parikalpālambanaṃ pari-
kalpita-lakṣaṇaṃ etāvad dhi parikalpyate yaduta nāma vā artho vēti |

trividha-trividhābhāso grāhya-grāhaka-lakṣaṇaḥ |

abhūta-parikalpo hi paratantrasya lakṣaṇaṃ || XI. 40

trividhas trividhaś cābhāso 'syēti trividha-trividhābhāsaḥ | tatra trivi- L.65
dhābhāsaḥ pa(Ns 54a)dābhāso 'rthābhāso dehābhāsaś ca | punas trividhā-
bhāso mana-udgraha-vikalpābhāsaḥ | mano yat kliṣṭam sarvadā | udgrahaḥ⁷¹⁾
pañca vijñāna-kāyāḥ | vikalpo manovijñānaṃ | tatra *prathamā* trividhā-
bhāso grāhya-lakṣaṇaḥ | dvitiyo grāhaka-lakṣaṇaḥ | ity ayaṃ abhūta-
parikalpaḥ paratantrasya lakṣaṇaṃ |

abhāva-bhāvātā yā ca bhāvābhāva-samānatā |

aśānta-śāntā 'kalpā ca pariniṣpanna-lakṣaṇaṃ || XI. 41

pariniṣpanna-lakṣaṇaṃ punas tathatā sā hy abhāvātā ca sarva-dharmā-
nām *parikalpitānām bhāvātā* ca tad-abhāvātvena bhāvāt | bhāvābhāva-
samānatā ca tayor bhāvābhāvayor abhinnatvāt | aśāntā cāgantukair⁷²⁾
upakleśaiḥ sā [Nc 45a] ntā ca prakṛti-*pariśuddhatvāt* | avikalpā ca⁷³⁾
vikalpāgocaratvāt niṣprapañcatayā | etena trividhaṃ lakṣaṇaṃ
tathatāyāḥ paridipitaṃ svalakṣaṇaṃ [saṃ]kleśa-vyavadāna-lakṣaṇaṃ⁷⁴⁾
avikalpa-lakṣaṇaṃ ca | uktaṃ trividhaṃ lakṣaṇaṃ |

niṣyanda-dharmam ālambya yoniśo manasikriyā |⁷⁵⁾

cittasya dhātau sthānaṃ ca sad-asattārtha-paśyanā || XI. 42

lakṣaṇā punaḥ pañca-vidhā yoga-bhūmiḥ | ādhāra ādhānam ādarśa āloka
āśrayaś ca | tatrādhāro *niṣyanda*(Ns 54b)-dharmo yo buddhenādhigamo⁷⁶⁾
deśitaḥ sa tasyādhigamasya *niṣyandaḥ*⁷⁷⁾ | ādhānaṃ yoniśo manaskāraḥ |

ādarśaḥ cittasya dhātau sthānaṃ samādhir yad etat pūrvaṃ nāmi
sthānaṃ uktaṃ | ālokaḥ sad-asatvenārtha-darśanaṃ lokottarā prajñā
⁷⁸⁾ yavā sac ca sato yathā-bhūtaṃ paśyaty asac cāsataḥ | āśraya āśraya-*parā-*
⁷⁹⁾ *vṛttih* |

samatā-gamaṇaṃ tasminn ārya-gotraṃ hi nirmalaṃ |

samaṃ viśiṣṭaṃ anyūnādhikaṃ lakṣaṇā matā || XI. 43

Ba.66 samatā-gamaṇam anāśrava-dhātau ārya-gotre tad-anyair āryaiḥ | tac ca
nirmalam ārya-gotraṃ buddhānāṃ | samaṃ vimukti-samatayā śrāvaka-
pratyekabuddhaiḥ | viśiṣṭaṃ pañcabhir viśeṣaiḥ | viśuddhi-viśeṣeṇa
savāsana-kleśa-viśuddhitāḥ | pariśuddhi-viśeṣeṇa kṣetra-pariśuddhitāḥ |
kāya-viśeṣeṇa dharmā-kāyatayā | saṃbhoga-viśeṣeṇa parṣan-maṇḍaleṣv
avicchinna-dharma-saṃbhoga-pravartanataḥ | karma-viśeṣeṇa ca tuṣita-
bhavana-vāsādi-nirmāṇaiḥ satvārtha-kriyānuṣṭhānataḥ | na ca tasyō-
natvaṃ saṃkleśa-pakṣa-nirodhe nādhikatvaṃ vyavadā(Ns 45b)na-pakṣō-
L.66 tpāda ity eṣā pañca-vidhā yoga-bhūmir lakṣaṇā | tayā hi tal-lakṣyaṃ
lakṣaṇaṃ ca lakṣyate |

vimukti-paryeṣtau ṣaḍ (Na 55a) ślokaḥ |

padārtha-deha-nirbhāsa-parāvṛttir anāsravaḥ |

dhātur bija-parāvṛtteḥ sa ca sarvatragāśrayaḥ || XI. 44

bija-parāvṛtter ity ālaya-vijñāna-parāvṛttitāḥ | padārtha-deha-nirbhāsā-
nāṃ vijñānānāṃ parāvṛttir anāsravo dhātur vimuktiḥ | sa ca sarva-
tragāśrayaḥ śrāvaka-pratyeka-buddha-gataḥ |

caturdhā vaśitā-vṛtter manasaś cōdgrahasya ca |

vikalpasyāvikalpe hi kṣetre jñāne 'tha karmaṇi || XI. 45

manasaś cōdgrahasya ca vikalpasya cāvṛtteḥ parāvṛtter ity arthaḥ |
caturdhā vaśitā bhavati yathā-kramam avikalpe kṣetre jñāna-karmanōś
ca |

acalādi-tribhūmau ca vaśitā sā caturvidhā |

dvidhāikasyāṃ tad-anyasyāṃ ekāikā vaśitā matā || XI 46

sā cēyam acalādi-bhūmi-traye caturdhā vaśitā veditavyā | ekasyāṃ
acalāyāṃ bhūmau dvididhā | avikalpe⁸⁰⁾ cānabhisaṃskāra-nirvikalpatvāt |
kṣetre ca buddha-kṣetra-pariśodhanāt | tad-anyasyāṃ bhūmāv ekāikā
vaśitā sādhumatyāṃ jñāna-vaśitā pratisaṃvid-viśeṣa-lābhāt | dharmā-
meghāyāṃ karmaṇy abhijñā-karmaṇāṃ avyāghātāt |

viditvā nairātmyaṃ dvididham iha dhimān bhava-gataṃ |

samaṃ tac ca jñātvā praviśati sa tatvaṃ grahaṇataḥ |

tatas tatra sthānān manasa i(Ns 55b)ha na khyāti tad api

tad-akhyānaṃ muktiḥ parama upalambhasya vigamaḥ || XI. 47

apara vimukti-paryāyaḥ | dvididham nairā(Nc 44a)-tmyaṃ viditvā bhava-
traya-gataṃ bodhisatvaḥ samaṃ tac ca jñātvā dvididha-nairātmyaṃ
Ba.67 parikalpita-pudgalābhāvāt parikalpita-dharmābhāvāt na tu sarvathāivā-
bhāvataḥ | tatvaṃ praviśati vijñapti-mātratāṃ grahaṇato grahaṇa-
mātram etad iti | tatas tatra tatva-vijñapti-mātra-sthānān manasas tad
api tatvaṃ na khyāti vijñapti-mātraṃ | tad-akhyānaṃ muktiḥ parama
L.67 upalambhasya yo vigamaḥ pudgala-dharmayor anupalambhāt |

ādhāre saṃbhārād ādhāne sati hi nāma-mātraṃ-paśyan |

paśyati hi nāma-mātraṃ tat paśyaṃs tac ca nāiva paśyati

bhūyaḥ || XI. 48

apara-paryāyaḥ | ādhāra iti śrutau saṃbhārād iti saṃbhṛta-saṃbhārasya
pūrva-saṃbhāra-lābhāt | ādhāne satīti yoniśo-manaskāre nāma-mātraṃ
paśyann ity abhilāpa-mātraṃ artha-rahitaṃ | paśyati hi nāma-mātraṃ iti
vijñapti-mātraṃ nāma arūpiṇaś catvāraḥ skandhā iti kṛtvā tat-paśyaṃs
tad api bhūyo nāiva paśyaty arthābhāve tad-vijñapti-adarśanād ity ayam
anupalambho vimuktiḥ |

cittam etat sadauṣṭhulyam ātma-darśana-pā(Ns 56a)śitam |

pravartate nivṛttis tu tad-adhyātma-sthiter matā || XI. 49

apara-prakāraś cittam etat sadauṣṭhulyaṃ pravartate janmasu | ātma-
darśana-pāśitam iti dauṣṭhulya-kāraṇaṃ darśayati | dvididhenātma-

darśanena pāśitam ataḥ sadauṣṭhulyam iti | nivṛttis tu tad-adhyātma-
sthiter iti tasya cittasya citta evāvasthānād ālambanānupalambhataḥ |
niḥsvabhāvatā-paryeṣṭau śloka-dvayaṃ |

**svayaṃ svenā(Nc 46b) tmanā 'bhāvāt svabhāve cānavasthiteḥ |
grāhavat tad-abhāvāc ca niḥsvabhāvatvam iṣyate || XI. 50**

svayam abhāvān niḥsvabhāvatvaṃ dharmāṇāṃ pratyayādhinatvāt |
svenātmanā 'bhāvān niḥsvabhāvatvaṃ niruddhānāṃ punas tenātmanā-
nutpatteḥ | *svabhāve* ⁸⁶⁾ navasthitatvān niḥsvabhāvatvaṃ kṣanikatvād ity
etat trividhaṃ niḥsvabhāvatvaṃ saṃskṛta-lakṣaṇa-trayānugaṃ vedi-
tavyaṃ | grāhavat tad-abhāvāc ca niḥsvabhāvatvaṃ tad-abhāvād iti
svabhāvābhāvāt ⁸⁷⁾ | yathā bālānāṃ svabhāva-grāho nitya-sukha-*śucy-ātmā* ⁸⁸⁾
vā 'nyena vā parikalpita-lakṣaṇena tathāsau svabhāvo nāsti tasmād api
niḥsvabhāvatvaṃ dharmāṇāṃ iṣyate |

**niḥsvabhāvatayā siddhā uttarōttara-niśrayāt |
anutpannāniruddhādi-śānta-prakṛti-nirvṛtāḥ || XI. 51**

L.68 Ba.68 ⁹¹⁾ *siddhā* niḥsvabhāvatayā 'nutpādādayaḥ | (Ns 56b) yo hi niḥsvabhāvaḥ so
'nutpanno yo 'nutpannaḥ so 'niruddho yo 'niruddhaḥ sa ādi-śānto ya
ādi-śāntaḥ sa prakṛti-parinirvṛta ity evam uttarōttara-niśrayair ebhir
niḥsvabhāvatādibhir ⁹²⁾ niḥsvabhāvatayā 'nutpādādayaḥ siddhā bhavanti |
⁹³⁾ *anutpattika*-dharma-kṣānti-paryeṣṭau āryā |

**ādau tatve 'nyatve svalakṣaṇe svayam athānyathā-bhāve |
saṃkleṣe 'tha viśeṣe kṣāntir anutpatti-dharmōktā || XI. 52**

aṣṭāsv anutpatti-dharmeṣu kṣāntir anutpattika-dharma-kṣāntiḥ | ādau
saṃsārasya na hi tasyādy-utpattir asti | tatve 'nyatve ca pūrva-
paścimānāṃ na hi saṃsāre teṣāṃ eva dharmāṇāṃ utpattir ye pūrvam
utpannās tad-bhāvenānutpatteḥ | na cānyeṣāṃ apūrva-prakārānutpatteḥ |
svalakṣaṇe parikalpitasya svabhāvasya na [Nc 47a] hi tasya kadācid
utpattiḥ | svayam anutpattau paratantrasya | anyathā-bhāve pariniṣ-
pannasya na hi tad-*anyathā-bhāvasyō* ⁹⁴⁾tpattir asti | saṃkleṣe prahiṇe na hi

kṣaya-jñāna-lābhinaḥ saṃkleṣasyōtpattiṃ punaḥ paśyanti | viśeṣe
buddha-dharma-kāyānāṃ na hi teṣāṃ viśeṣōtpattir asti | ity ete(Ns 57a)ṣv
anutpatti-dharmeṣu kṣāntir anutpatti-dharmōktā |
ekayānatā-paryeṣṭau sapta ślokāḥ |

**dharma-nairātmya-muktināṃ tulyatvāt gotra-bhedataḥ |
dvy-āśayāpteṣ ca nirmānāt-paryantād ekayānatā || XI. 53**

dharma-tulyatvād ekayānatā śrāvakādināṃ dharma-dhātor abhinna-
tvāt yātavyaṃ yānam iti kṛtvā | nairātmyasya tulyatvād ekayānatā
śrāvakādināṃ ātmābhāvatā-sāmānyād yātā yānam iti kṛtvā | vimukti-
tulyatvād ekayānatā yāti yānam iti kṛtvā | gotra-bhedād ekayānatā |
aniyata-śrāvaka-gotrāṇāṃ mahāyānena niryānād yānti tena yānam iti
kṛtvā | dvy-āśayāpter eka-yānatā buddhānāṃ ca sarva-satveṣv ātmāśaya-
prāpteḥ śrāvakānāṃ ca tad-gotra-niyatānāṃ pūrvam bodhi-saṃbhāra
caritānāṃ ātmani buddhāśaya ⁹⁹⁾-prāpter abhinna-saṃtānādhimokṣa-lābhato
buddhānubhāvena tathāgatānugraha-viśeṣa-pradeśa-lābhāya ity ekatvā-
śaya-lābhenāikatvāt buddha-tac-chrāvakāṇāṃ ekayānatā | nirmānād
eka-yānatā yathōktam aneka-śata-kṛtvo 'haṃ śrāvakayānena parinir-
vṛta ity vineyānāṃ arthe tathā nirvāṇa-saṃ(Ns 57b)darśanāt | paryantād
apy eka-yānatā yataḥ pareṇa yātavyaṃ nāsti tad-yānam iti kṛtvā |
buddhatvam eka-yānam evaṃ tatra tatra sūtre tena *tenā* ¹⁰⁰⁾[Nc 47b]bhi-
prāyeṇāika-yānatā veditavyā na tu yāna-trayaṃ nāsti |

kim arthaṃ punas tena tenābhiprayeṇāika-yānatā buddhair deśitā | Ba.69

ākarsaṇārtham ekeṣāṃ anya-saṃdhāraṇāya ca |

deśitāniyatānāṃ hi saṃbuddhair eka-yānatā || XI. 54

ākarsaṇārtham ekeṣāṃ iti ye śrāvaka-gotrā niyatāḥ | anyeṣāṃ ca saṃ-
dhāraṇāya ye bodhisatva-gotrā niyatāḥ |

śrāvako 'niyato dvedhā drṣṭādrṣṭārtha-yānataḥ |

drṣṭārtho vīta-rāgaś cāvīta-rāgo 'py asau mṛduḥ || XI. 55

śrāvakaḥ punar niyato dvividho veditavyaḥ | drṣṭārtha-yānaś ca yo

dr̥ṣṭa-satyō mahāyānena niryāti adr̥ṣṭārtha-yānaś ca yo na dr̥ṣṭa-satyō
mahāyānena niryāti | dr̥ṣṭārthaḥ punas vīta-rāgaś cāvīta-rāgaś ca kāmē-
bhyaḥ | asau ca m̥dur-dhandha-gatiko veditavyaḥ |
yo dr̥ṣṭārtho dvididho uktaḥ |

**tau ca labdhārya-mārgasya bhaveṣu pariṇāmanāt |
acintya-pariṇāmiyā upapattiyā samanvitau || XI. 56**

tau ca dr̥ṣṭārthau labdhārya-mārgasya bhaveṣu pariṇāmanāt | (Ns 58a)
acintya-pariṇāmiyā upapattiyā samanvāgatau veditavyau | acintyo hi
tasyārya-mārgasya pariṇāma upapattau tasmād acintya-pariṇāmiḥ |

**prañidhāna-vaśād eka upapattiṃ prapadyate |
eko 'nāgāmitā-yogān nirmāṇaiḥ pratipadyate || XI. 57**

tasyoś cāikaḥ prañidhāna-vaśād upapattiṃ gṛhṇāti yathēṣṭaṃ yo na
vīta-rāgaḥ | eko 'nāgāmita-yoga-balena nirmāṇaiḥ |

**nirvāṇābhiratavāc ca tau dhandha-gatikau matau |
[Nc 48a] punaḥ punaḥ svacittasya samudācāra-yogataḥ || XI. 58**

L.70 tau ca nirvāṇābhiratavād ubhāv apī dhandha-gatikau matau ciratareṇā-
bhisam̥bodhataḥ | svasya śrāvaka-cittasya nirvit-sahagatasyābhikṣṇaṃ
samudācārāt |

**so 'kṛtārtho hy abuddhe ca jāto dhyānārtham udyataḥ |
nirmāṇārthī tad-āśritya parāṃ bodhim avāpnute || XI. 59**

Ba.70 yaḥ punar asāv avīta-rāgo dr̥ṣṭa-satyāḥ so 'kṛtārthaḥ śaikṣo bhavan
buddha-rahita kāle jāto dhyānārtham udyato bhavati nirmāṇārthī | tac ca
nirmāṇam āśritya krameṇa parāṃ bodhiṃ prāpnoti | tam avasthā-traya-
sthaṃ saṃdhāyōktaṃ bhagavatā śrīmālā-sūtre | śrāvako bhūtvā praty-
ekabuddho bhavati punaś ca buddha iti | agni-(Ns 58b) *dr̥ṣṭāntena* yadā ca
pūrvaṃ dr̥ṣṭa-satyāvasthā yadā buddha-rahite kāle svayaṃ dhyānam
utpādya janma-kāyaṃ tyaktvā nirmāṇa-kāyaṃ gṛhṇāti yadā ca parāṃ
bodhiṃ prāpnoti |

vidyā-sthāna-paryeṣṭau ślokaḥ |

**vidyā-sthāne pañca-vidhe yogam akṛtvā
sarva-jñatvaṃ nāiti kathaṃ cit paramāryaḥ |
ity anyeṣāṃ nigrahaṇānugrahaṇāya**

svajñārthaṃ vā tatra karoty eva sa yogam || XI. 60

pañca-vidhaṃ vidyā-sthānaṃ | adhyātma-vidyā hetu-vidyā śabda-vidyā
cikitsā-vidyā śilpa-karma-sthāna-vidyā ca | tad yad-arthaṃ bodhisatvena
paryeṣitavyaṃ tad darśayati | sarva-jñatva-prāpty-arthaṃ abhedena sar-
vaṃ | bhedena punar hetu-vidyāṃ śabda-vidyāṃ ca paryeṣate nigrahār-
thaṃ anyeṣāṃ tad-anadhimuktānāṃ | cikitsā-vidyāṃ śilpa-karma-sthāna-
vidyāṃ cānyeṣāṃ anugrahārthaṃ [Nc 48b] tad-arthikānāṃ | adhyātma-
vidyāṃ svayam ajñārthaṃ |

dhātu-puṣṭi-paryeṣṭau trayodaśa-ślokaḥ | pāramitā-paripūraṇārthaṃ ye L.71
pāramitā-pratiṣam̥yuktā eva manasikārā dhātu-puṣṭaye bhavanti ta etā-
bhir gāthābhir deśitāḥ | *tatrēyam-ādi-gāthā* |

hetūpalabdhi-tuṣṭiś ca niśraye tad-anusmṛtiḥ |

sādhāraṇa-phalēcchā ca yathā-boddhā(Ns 59a)dhimucyanā || XI.

61

te punar hetūpalabdhi-tuṣṭi-manasikārāt | yāvad-agratvātmāvadhāraṇa-
manasikāraḥ | tatra hetūpalabdhi-tuṣṭi-manasikāra ādita eva tāvat |
gotra-stho bodhisatvaḥ svātmani pāramitānāṃ gotraṃ paśyan
hetūpalabdhi-tuṣṭiyā pāramitā-dhātu-puṣṭiṃ karoti | gotra-stho 'nuttarā-
yāṃ samyak-sambodhau cittam utpādayatīty ato 'nantaraṃ niśraya-
tad-anusmṛti-manasikāraḥ | sa hi bodhisatvaḥ svātmani pāramitānāṃ
saṃniśraya-bhūtaṃ bodhicittaṃ samanupaśyann evaṃ manasikaroti
niyatam etāḥ pāramitāḥ paripūriṃ gamiṣyanti | tathā hy asmākaṃ
bodhicittaṃ saṃvidyate iti | utpādita-bodhicittasya pāramitābhiḥ sva-
parārtha-prayoge sādhāraṇa-phalēcchā-manasikāra āsāṃ pāramitā-
nāṃ para-sādhāraṇaṃ vā phalaṃ bhavaty anyathā vā mā bhūd ity
abhisam̥skaraṇāt | svaparārthaṃ prayujyamāno 'saṃkleśōpāyaṃ tatvār-

thaṃ pratividyatīty ato 'nantaraṃ yathā-bodhādhimucyanā-(Ns 59b)
manasikāraḥ | evaṃ sarvatrānukramo veditavyaḥ | yathā buddhair
bhagavadbhīḥ pāramitā abhisambuddhā abhisambhotsyante 'bhisambu-
dhyante ca tathā 'ham adhimucye ity abhisamskaraṇāt |

Ba.71 **caturvidhānubhāvena priyaṇākheda-niścayaḥ |**

[Nc 49a] **vipakṣe pratipakṣe ca pratipattiś caturvidhā || XI. 62**

anubhāva-priyaṇā-manasikāraś caturvidhānubhāva-darśana-priyaṇā
caturvidhānubhāvo vipakṣa-prahāṇaṃ sambhāra-paripākaḥ svaparānu
graha āyatyāṃ vipākaphala-⁽¹⁰⁷⁾niścayā-dānātā ca | satva-svabu-
ddhadharma-paripākam ārabhyākheda-niścaya-manasikāraḥ sarva-
satva-vipratipattibhīḥ sarva-duḥkhāpattipātaiś cākheda-niścayābhisam-
skaraṇāt | parama-bodhi-prāptaye vipakṣe pratipakṣe ca caturvidha-
pratipatti-manasikāraḥ | dānādi-vipakṣāṇāṃ ca mātsaryādīnāṃ prati-
deśanā pratipakṣāṇāṃ ca dānādīnāṃ anumodanā tad-adhipateya-dharma-
deśanārthaṃ ca buddhādhyeṣāṇā | tāsāṃ ca bodhau pariṇāmanā |

L.72

prasādaḥ sampraticchā ca dāna-cchandaḥ paratra ca |

samṇāhaḥ praṇidhānaṃ ca abhinanda manaskriyā || XI. 63

adhimukti-balādhānatām ārabhya pārami(Ns 60a)tādhipateya-dharmā-
rthe ca prasāda-manasikāraḥ | dharmā-paryeṣṭim ārabhya samprati-
cchana-manasikāras tasyāiva dharmasyāpratibahana-yogena parigra-
haṇatayā | ⁽¹⁰⁸⁾deśanām ārabhya dāna-cchanda-manasikāro dharmasyārtha-
sya ca prakāśanārthaṃ pareṣāṃ | pratipattim ārabhya samṇāha-
manasikāro dānādi-paripūraye samṇahanāt | praṇidhāna-manasikāras
tat-paripūri-⁽¹⁰⁹⁾pratyaye samavadhānārthaṃ | abhinanda-manasikāro 'ho
bata dānādi-pratipattiyā samyak sampādāyeyam ity abhinandanāt | eta
eva trayo manasikā[Nc 49b]rā avavādānuśāsanyāṃ yojayitavyāḥ | upā-
yōpasamḥita-karma-manasikāraḥ samkalpaiḥ sarva-prakāra-dānādi-pra-
yoga-manasikaraṇāt |

śakti-lābhe sad-autsukyaṃ dānādu ṣaḍvidhe ghaṇaṃ |

paripāke 'tha pūjāyāṃ sevāyāṃ anukampanā || XI. 64

autsukya-manasikāraś caturvidhaḥ | śakti-lābhe ca dānādu ṣaḍvidhe
dāna-dāne yāvat prajñā-dāne | evaṃ śilādīṣu ṣaḍvidheṣu | pāramitābhir
eva samgraha-vastu-prayogeṇa satva-paripāke | pūjāyāṃ ca dānena
lābha-satkāra-pūjāyā | ⁽¹¹⁰⁾śeṣābhīś ca pratipatti-pūjāyā | aviparīta-pāra-
mitōpadeśārthaṃ ca kalyāṇamitra-(Ns 60b)sevāyāṃ autsukya-manasi-
kāro veditavyaḥ | anukampā-manasikāraś caturbhir apramāṇair dānādy-
upasaṃhāreṇa maitrayataḥ | mātsaryādi-samavadhānena satveṣu karuṇā-
yataḥ | dānādi-samanvāgateṣu muditāyataḥ | tad-asamkleśādhimokṣataś
ca upekṣāyataḥ |

akṛte kukṛte lajjā kaukṛtyaṃ viṣaye ratiḥ |

amitra-saṃjñā khede ca racanōdbhavanā-matiḥ || XI. 65

hrī-dharmam ārabhya lajjā-manaskāro 'krteṣu vā dānādīṣv aparipūrṇa-
mithyākṛteṣu vā lajjā lajjāyamānaś ca pravṛtti-nivṛtṭy-artham anānuṣaṅ-
gikaṃ kaukṛtyāyate | dhṛtim ārabhya rati-manaskāro dānādy-ālambane
'vikṣepataś cittasya dhāraṇāt | akheda-manaskāro dānādi-prayoga-
parikhede śatru-saṃjñā-karaṇāt | racanā-cchanda-manaskāraḥ pāramitā-
pratisaṃyukta-śāstra-racanābhisamskaraṇāt | loka-jñatām ārabhya
udbhāvanā-manaskāras tasyāiva śāstrasya loke yathā-bhājanam ud-
bhāvanābhisamskaraṇāt |

Ba.72

L.73

dānādayaḥ pratisaraṇaṃ sambodhau nēśvarādayaḥ ||

doṣaṇāṃ ca guṇānāṃ ca [Nc 50a] pratisaṃvedanā dvayoḥ || XI.

66

pratisaraṇa-manaskāro bodhi-prāptaye dānādīnāṃ pratisaraṇān
nēśvarādīnāṃ (Ns 61a) pratisaṃvin-manaskāro mātsarya-dānādi-
vipakṣa-pratipakṣayor doṣa-guṇa-pratisaṃvedanāt |

cayānusmaraṇa-pritir mārthyasya ca darśanaṃ |

yoge 'bhiḷāṣo 'vikalpe tad-dhṛtyāṃ pratyayāgame || XI. 67

cayānusmaraṇa-priti-manaskārōdānādy-upacaye puṇya-jñāna-sambhārō-

pacaya-saṃdarśanāt | mähārthya-saṃdarśana-manaskāro dānādīnām
bodhipakṣe bhāvārthena mahābodhi-prāpty-artha-saṃdarśanāt | abhilāṣa-
manaskāraḥ sa punaś caturvidhaḥ | yogābhilāṣa-manaskāraḥ śamatha-
vipaśyanā-yoga-bhāvanābhilāṣāt | avikalpābhilāṣa-manaskāraḥ pāra-
mitā-paripūraṅgārtham upāya-kausalābhilāṣāt | dhṛty-abhilāṣa-manas-
kāraḥ pāramitādhipateya-dharmārtha-dhāraṅgābhilāṣāt | pratyayābhi-
gamābhilāṣa-manaskāraḥ samyak-praṇidhānābhisamkāraṇāt |

¹¹³⁾ **sapta-prakāśad-grāha-vyutthāne śakti-darśanam |**

āścaryam cāpy anāścaryam saṃjñā cāiva caturvidhā || XI. 68

sapta-prakāśad-grāha-vyutthāne-śakti-darśana-manaskāraḥ | saptavi-
dho 'sad-grāhaḥ | asati sad-grāho doṣavati guṇavatva-grāho guṇavaty-
aguṇavatva-grāhaḥ | sarva-saṃskāreṣu ca nitya-sukhāśad-grāhau | sarva-
dharmeṣu cātmasa(Ns 61b)d-grāhaḥ | nirvāṇe cāśāntāśad-grāhaḥ | yasya
pratipakṣeṇa ¹¹⁴⁾ *sūnyatādi*-samādhi-trayaṃ dharmōddāna-catuṣṭayaṃ ca
deśyate | āścarye caturvidha-saṃjñā-manaskāraḥ | pāramitāsūdhāra-
saṃjñā āyatatva-saṃjñā pratikāra-nirapekṣa-saṃjñā vipāka-nirapekṣa-
saṃjñā ca | anāścarye 'pi *caturvidha-saṃjñā-manaskāra*[Nc 50b]ś *catur-*
vidham ¹¹⁵⁾ anāścaryam audarya āyatatve ca sati pāramitānām buddhatva-
phalābhinirvarttanāt | ¹¹⁶⁾ asminn eva ca dvaye sati svapara-samacittāva-
¹¹⁷⁾ *sthāpanā* | ¹¹⁸⁾ tad-viśiṣṭebhyaś ca *śakrādibhyaḥ* pūjādi-lābhe sati pratikāra-
nirapekṣatā | [*sarva-lokebhyo abhyudgata-śarīra-bhoga-lābhe saty api vipā-*
ka-nirapekṣatā |

¹¹⁹⁾ **samatā sarva-satveṣu dṛṣṭiś cāpi mahātmikā |**

pratikāraḥ para-guṇac ca tryāśāstir nirantarāḥ || XI. 69

samatā-manaskāraḥ sarva-satveṣu dānādibhiḥ samatā-pravṛtṭy-abhisam-
skaraṇāt | mahātma-dṛṣṭi-manaskāraḥ sarva-satvōpakāratayā pāramitā-
saṃdarśanāt |] ¹²⁴⁾ *pratyupakāśaṃsana-manaskāro dānādi-guṇa-pravṛtṭyā*
parebhyaḥ | āśāsti-manaskāraḥ satveṣu tri-sthānā-śaṃsanāt pāramitānām
bodhisatva-bhūmi-niṣṭhāyā buddha-bhūmi-niṣṭhāyāḥ satvārthācaraṇā-śaṃ-
¹²⁵⁾ ¹²⁶⁾

sanāc ca | nirantara-manaskāro dānādibhir avandhya-kāla-karaṅgābhisam-
karaṇāt |

¹²⁷⁾ **buddha-praṇitānuṣṭhānād arvāg asthāna-cetanā |**

tad-dhāni-vṛddhyā satveṣu anāmodaḥ pramodanā || XI. 70

samyakprayoga-manaskāro 'viparītānuṣṭhānād arvāg asthā(Ns 62a)na-
manasikaraṇāt | anāmoda-manaskāro dānādibhir hiyamāneṣu | pramoda-
manaskāro dānādibhir vardhamāneṣu satveṣu |

¹²⁸⁾ **prativarṇikā-bhūtāyām bhāvanāyām ca nāruciḥ**

nādhivāsa-manaskāro vyākṛte niyate sprhā || XI. 71

aruci-manaskāraḥ pāramitā-*prativarṇikā-bhāvanāyām* | ruci-manaskāro
bhūtāyām | anadhivāsanā-manaskāro mātśāryādi-vipakṣa-vinaya-
nābhisamkāraṇāt | sprhā-manaskāro dvididhaḥ pāramitā-paripūri-
vyākāraṇa-lābha-sprhā-manaskāraḥ pāramitā-niyatabhūmy-avasthā-
lābha-sprhā-manaskāraś ca |

āyatyām darśanād vṛtti-ce(Nc 51a)tanā samatēkṣaṇā |

agra-dharmeṣu vṛtṭyā ca agratvātmāvadhāraṇā || XI. 72

āyatyām darśanād vṛtti-manaskāro *yasmin gatim* ¹³⁰⁾ gatvā bodhisatvena
satā 'vaśya-karanīyatā 'bhisamkāraṇāt dānādīnām |

samatekṣaṇā-manaskāras tad-anyair bodhisatvaiḥ sahatmanāḥ pāra-
mitā-sātatyā-karaṅgādhimokṣārtham | agratvātmāvadhāraṇa-manas-
kāraḥ pāramitāgradharma-pravṛtṭyā svātmanāḥ pradhāna-bhāva-saṃ-
(Ns 62b)darśanāt |

ete śubha-manaskārā daśa-pāramitānvayāḥ ||

sarvadā bodhisatvānām dhātu-puṣṭau bhavanti hi || XI. 73

iti nigamana-śloko gatārthaḥ |

dhama-paryeṣṭi-*prabhede* ¹³⁶⁾ dvau ślokaḥ |

puṣṭer adhyāśayato mahatī paryeṣṭir iṣyate dhire |

savivāsā hy avivāsā tathāiva vaibhūtvikī teṣāṃ || XI. 74

a-sa-kāyā labdha-kāyā prapūrṇa-kāyā ca bodhisatvānām |

bahumāna-sūkṣmamānā nirmānā cāiṣaṇābhimatā || XI. 75

trayodaśa-vidhā paryeṣṭiḥ | puṣṭitaḥ śrutādhimukti-puṣṭyā | adhyāśayat
 dharmā-mukha-śrotasā | mahatī ¹¹⁸⁾ *vibhūta*-lābhinām | savipravāsā pra-
 thamā | avipravāsā dvitīyā vaibhūtvikī tṛtīyā | akāyā śruta-cintā-mayī
 dharmakāya-rahitatvāt | sakāyā bhāvanā-mayī adhimukti-caryā-bhūmau
 | ¹¹⁹⁾ *labdha-kāyā* saptasu bhūmiṣu | paripūrṇa-kāyā śeṣāsu | bahumānādhi-
 mukti-caryā-bhūmau | sūkṣmamānā saptasu | nirmāṇā śeṣāsu |
 dharmā-hetutva-paryeṣṭau ślokaḥ |

rūpārūpe dharmo lakṣaṇa-hetus tathāiva cārogye |**aīsvarye 'bhijñābhis tad-akṣayatve ca dhirāṇām || XI. 76**

(Ns 63a) rūpe lakṣaṇa-hetur dharmāḥ | [Nc 51b] arūpe ārogya-hetuḥ
 kleśa-vyādhi-praśamanāt | aīsvarya-hetur abhijñābhis tad-akṣayatva-
 hetuḥ cānupadhis-śeṣa-nirvāṇe 'py anupacchedāt | ata evōktaḥ *brahma-*
¹²⁰⁾ *paripṛcchā-sūtre* | caturbhir ¹²¹⁾ *dharmaiḥ* samanvāgatā bodhisatvā dharmāḥ
 paryeṣante | ratna-saṃjñayā durlabhārthena bhaiṣajya-saṃjñayā kleśa-
 vyādhi-praśamanārthena artha-saṃjñayā avipraṇāśārthena nirvāṇa-
 saṃjñayā sarva-duḥkha-praśamanārthena | ratna-bhūtāni hi lakṣaṇāni
 śobhā-karatvād atas tad-dhetutvād dharmā-ratna-saṃjñā | ārogya-
 hetutvād bhaiṣajya-saṃjñā abhijñāīsvarya-hetutvād artha-saṃjñā | tad-
 akṣaya-hetutvān nirvāṇa-saṃjñāḥkṣaya-nirbhayatārthena |

vikalpa-paryeṣṭau ślokaḥ

abhāva-bhāvādhy-apavāda-kalpā**ekatva-nānā-sva-viśeṣa-kalpāḥ |****yathārtha-nāmābhīniveśa-kalpāḥ |****jīnātma-jaiḥ saṃparivarjanīyāḥ || XI. 77**

daśavidhā-vikalpo bodhisatvena parivarjanīyaḥ | abhāva-vikalpo yasya
 pratipakṣeṇāha | ¹²²⁾ *prajñāpāramitāyām* iha bodhisatvo bodhisatva eva sann
 iti | bhāva-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | bo(Ns 63b) dhisatvaḥ na
 samanupaśyatīty evamādi | adhyāropa-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha |

rūpaḥ śāriputra svabhāvena śūnyam iti | apavāda-vikalpo yasya pratipa- Ba.75
 kṣeṇāha | na śūnyatayēti | ekatva-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | yā
 rūpasya śūnyatā na tad rūpaḥ iti | nānātva-vikalpo yasya pratipakṣeṇā-
 ha | na cānyatra śūnyatāyā rūpaḥ rūpaḥ eva śūnyatā śūnyatāiva rūpaḥ
 iti | svalakṣaṇa-vikalpo yasya pratipakṣe[Nc 52a]ṇāha | nāma-mātram
 idaṃ yad idaṃ rūpaḥ iti | viśeṣa-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | rūpa-
 sya hi nōtpādo na nirodho na saṃkleśo na vyavadānam iti | yathā-
 nāmārthābhīniveśa-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | kṛtrimāḥ nāmēty
 evamādi | yathārtha-nāmābhīniveśa-vikalpaś ca yasya pratipakṣeṇāha |
 tāni bodhisatvaḥ sarva-nāmāni na samanupaśyatīy asamanupaśyan nā-
 bhīnīviśate yathārthatayēty abhiprāyaḥ |

iti śubha-matir etya yatnam ugram**dvaya-paryeṣita-dharmatā-satatvaḥ |****pratiśaraṇam ataḥ sadā prajānām****bhavati guṇaiḥ sa samudravat prapūrṇaḥ || XI. 78**

anena nigamana-ślokena paryeṣṭi-māhātmyaḥ trividhaḥ darśayati |
 (Ns 64a) upāya-māhātmyam ugra-vīryatayā saṃvṛti-paramārtha-satya-
 dharmatā-paryeṣaṇataś ca tatvaḥ satyam ity arthaḥ | parārtha-māhā-
 tmyaḥ pratiśaraṇī-bhāvāt prajānām | svārtha-māhātmyaḥ ca guṇaiḥ
 samudravat prapūrṇatvāt |

mahāyāna-sūtrālaṃkāre dharmā-paryeṣṭy-adhikāra ekādaśaḥ

略号

*表示は従来の私の発表した論文に準ずる。

L. = Lévi 本

Ba. = Bagchi 本

Ui 宇井伯寿博士

Nagao 長尾雅人博士

Yamaguchi 山口益博士
Umino 海野孝憲教授

註

- 1) L. -ād avipratisāreṇa (L. の仏訳 -ādikrameṇa) Ba. ādikrameṇa Nc. ādinumeṇa or ādinraneṇa (ādikrameṇa?) Tib. la sogs paḥi rim gis
- 2) L. vidhārthaḥ Ba. vidhārthaḥ Ns. arthāḥ Nc. arthāḥ
- 3) L. karmanāḥ (L. の仏訳 karmaṇām) Ba. karmaṇām Ns. karmanāḥ Nc. karmanāḥ Tib. las
- 4) L. samavadyotaḥ (L. の仏訳 samavaghātaḥ) Ba. samavaghātaḥ Ns. samavadyotaḥ or samavaghātaḥ Nc. samavadyotaḥ (?)
- 5) L. paryāyeṇa | ajñānāt (L. の仏訳 paryāyeṇānujñānāt) Ba. paryāyeṇānujñānāt Ns. paryāyeṇānujñānāt Nc. paryāyeṇānujñānāt
- 6) L. vedāpattiḥ (L. の仏訳 ced āpattiḥ) Ba. cedāpattiḥ Ns. cedāpattiḥ or vedāpattiḥ Nc. cedāpattiḥ
- 7) L. ākaraiḥ (L. の仏訳 ākārāiḥ) Ba. ākārāiḥ Ns. ākārāiḥ
- 8) L. āpannābhāve (L. の仏訳 āpattyabhāve) Ba. āpattyabhāve Ns. āpattyabhāva (or āpattyabhāve) Nc. āpattyabhāva
* āpattyabhāva-dharmatā? (Tib. ~med paḥi chos ñid)
- 9) L. dharma (L. の仏訳 dharmatā) Ba. dharmatā Ns. dharma Nc. dharma Tib. chos ñid
- 10) L. yadā'rocite Ba. yadā'rocite Ns. yadā'rocite Nc. yadā'rocite Nagao. yadārocite
- 11) L. saṃghaśīkṣāṃ (L. の仏訳 saṃghaṃ śīkṣāṃ) Ba. saṃghaṃ śīkṣāṃ Ns. saṃghaśīkṣāṃ Nc. saṃghaśīkṣā? B. saṃghaśīkṣāṃ
- 12) L. ナシ (L. の仏訳 dvayam) Ba. dvayam Ns. dvayaṃ Nc. dvayaṃ
- 13) L. ナシ (L. の仏訳 dvayor dvayārthena lābho dvayor anupalambhataḥ ||)
Ba. lābho dvayor dvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ ||
Ns. lābho dvayodvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ |
(dvayo(r)dvaya or dvayādvaya)
Nc. lābho dvayor dvayārthena dvayāś (dvayoś) cānupalambhataḥ ||
Nagao. lābho dvayor dvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ |
Tib. don gñis kyi ni gñis po rñed

漢訳「得二無二義」(大正31. 610b)

世説釈 dvayor……dvayārthena lābho

- 14) L. ナシ
Ba dharmāmbanāṃ yo deśitaḥ kāyādikañ cādhyātmikāṃ
Ns dharmāmbanāṃ yo deśitaḥ kāyādikañ cādhyātmikāṃ
Nc. dharmāmbanāṃ yo deśitaḥ kāyādikaṃ cādhyātmikāṃ
Nagao dharmāmbanāṃ yo deśitaḥ kāyādikaṃ cādhyātmikāṃ
- 15) L. ādhyātmikāṃ bāhyaṃ ca |
Ba. ādhyātmikabāhyañ ca |
Ns. ādhyātmikabāhyañ ca |
Nc. ādhyātmikabāhya ca |
B. ādhyātmikabāhyañ ca |
Nagao. ādhyātmika-bāhyañ ca |
- 16) L. tathatādvayaṃ (L. の仏訳 tathatā dvayam) Ba. tathatā dvayam
- 17) L. | śrutamayena……tallābhaḥ
(L. の仏訳 śrutamayena……tallābhaḥ |)
Ba. | śrutamayena……tallābhaḥ,
Ns. śrutamayena……tallābhaḥ |
- 18) L. 'lpajalpa (L. の仏訳 'pajalpa or 'jalpa)
Ba 'jalpa Ns. 'jalpa Nc. 'jalpa
- 19) L. ナシ Ba ナシ Ns. yoga Nc. yoga Tib. rnal ḥbyor
- 20) L. ナシ (L. の仏訳 nirvitarka-savicāra) Ba. avitarka-vicāra Ns. avitarka-savicāra Nc. avitarka-savicāra Nagao. avitarka-vicāra
- 21) L. vinirdhāvanā- (L. の仏訳 nirvighāṭanā) Ba. nirvirghāṭanā-(nirvighāṭanā)
Ns. vinirdhāvanā- Nc. vinirdhāvanā- Pradhan: Abhidharmakośa-bhāṣya p. 410, l. 18 vinirdhāvana
- 22) L. pradadhāti Ba. pragṛhñāti Ns. pradadhāti Nc. pradadhāti Nagao. pragṛhñāti (Tib) Tib. rab tu ḥdsin pa
- 23) L. pragṛhñāti Ba. pradadhāti Ns. pragṛhñāti Nc. pratigṛhñāti?
- 24) L. saṃrakṣaṇā Ba. saṃrakṣaṇā Ns. saṃlakṣaṇā Nc. saṃlakṣaṇā Tib. ṣes pa
- 25) L. -kāra Ba. ākāra Ns. ākāra Ui. ākāra
- 26) L. sthity Ba. sthity Ns. cittasthity Nc. cittasthity Tib. sems gnas pa

漢訳「心住」(大正31. 611b)

- 27) L. srotasi Ba. srotasi Ns. śrotasi Nc. śrotasi
 28) Ns.Nc. artha-parikalpam が欠
 29) L. tatva Ba. tatva Ns. tatvārtha B. tatvārtha Tib. de kho na ñid kyī don
 30) L. tatra Ba. tatra Ns. tata Nc. tataḥ Tib. te la
 31) L. abhinnatvāta Ba. abhinnatvāt Ns. abhinnatvāt
 32) L. mājā yantra-(Lの仏訳 mājā mantra-) Ba. mājā mantra- Ns. mājā-mantra- Nc. mājāmantra-(欄外表示) Tib. sgyu maḥi śnags kyis
 33) L. svabhāvo Ba. svabhāvākāro Ns. svabhāvo Nagao svabhāvākāro (Tib) Tib. ño bo ñid kyī rnam par cf. Lévi 本 p. 59 l. 8 svabhāvākārā
 34) L. patiḥ (Lの仏訳 yatiḥ) Ba. yatiḥ Ns. yatiḥ Nc. yatiḥ Tib. sdom brtson
 35) L. tathā 'śraya- Ba. tathā ss 'śraya- Ns. tathā 'śraya-
 36) L. nāsau na bhāvaḥ Ba. nāsau na bhāvaḥ Ns. nāsau na bhāvaḥ Nc. nāsau na bhāve (?) Ui. asau nābhāvaḥ (?) Tib. yod pa gañ yin pa de ni med ba na yin no
 37) L. nāsau na bhāvaḥ Ba. nāsau bhāvaḥ Ns. nāsau na bhāvaḥ Nc. nāsau na bhāvaḥ Nagao. nāsau bhāvaḥ (Tib.) Tib. med pa gañ yin pa de ni yod pa ma yin no
 38) L. dvayābhatātrāsti Ba. dvayābhatātrāsti 本文(dvayābhāsatātrāsti?) Ns. dvayābhatā'trāsti Nc. dvayebhemā'trāsti? Yamaguchi. ābhāso 'trāsti Tib. gñis snañ de la yod Nagao. ābhatā (Tib. snañ)
 * ābhatā は ābhasatā の意。シラブルの関係で ābhatā となっている。
 * 長行には dvayābhāsatāsti とある。
 39) L. yā dvayatānāstitā Ba. yā dvayatānāstitā Ns. yādvayatānāstitā (yā dvayatā nāstitā?)
 40) L. āpavādābha (Lの仏訳 āpavādānta) Ba. āpavādānta Ns. āpavādānta Nc. āpavādānta
 41) L. āpavādābha (Lの仏訳 āpavādānta) Ba. āpavādānta Ns. āpavavādānta? Nc. āpavavādānta?
 42) É. Lamotte: Mahāyānasamgraha p. 98 (佐々木本 p. 32) 参照。
 43) L. grāhya (Lの仏訳 grāha) Ba. grāha Ns. grāhya Nc. grāhya Tib.

- hdsin pa
 44) L. pratibimban saṃkalikāṃ (Lの仏訳 pratibimba-saṃkalikāṃ) Ns. pratibimbasamkalikāñ or pratibimbasaṃkalikāñ Nc. pratibimbasamkalikāñ
 45) L. ābhāvaviśeṣataḥ (Lの仏訳 ābhāvaviśeṣataḥ) Ba. ābhāvaviśeṣataḥ Ns. ābhāvaviśeṣataḥ Nc. ābhāvaviśeṣataḥ
 46) L. tathābhāvād Ba. tathābhāvād Ns. tathābhāvād Tib. de bshin yod paḥi phyir 27偈(a) tathā bhāvāt
 47) L. lakṣanās (Lの仏訳 lakṣaṇā |) Ba. lakṣaṇā Ns. lakṣanās tasmāt Nc. lakṣanās tasmāt
 48) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Ui. bhāvāt? Tib. med
 49) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Tib. yod
 50) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Tib. med paḥi phyir (デルゲも同じ) Ui. bhāvāt? 漢訳「有体故」
 51) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Tib. yod paḥi phyir (デルゲも同じ) 漢訳「無体故」
 52) L. ya (Lの仏訳 ye) Ba. ye Ns. ye Nc. ye
 53) L. nirmārās (Lの仏訳 nirmānās) Ba. nirmārās Ns. nirmānās Nc. nirmānās Tib. ña rgyal med (デルゲも同じ)
 54) L. māyārājñeva (Lの仏訳 rājñeva?) Ba. rājñeva Ns. māyārājñeva Nc. māyārājñeva Tib. rgyal pa (北京版, デルゲ版) 漢訳「幻王」
 55) L. nirmārā (Lの仏訳 nirmānā) Ba. nirmārā Ns. nirmānā Nc. nirmāṇā
 56) L. saṃkleśa Ba. saṃkleśa Ns. saṃkleśa
 57) L. bhāvāṅgād (Lの仏訳 svabijād) Ba. svabijād Ns. svabijād Nc. svabijād Tib. rañ gi sa bon
 58) L. | bhāvanāmārgeṇa (Lの仏訳 bhāvanāmārgeṇa |) Ba. bhāvanāmārgeṇa (| bhāvanāmārgeṇa) Ns. bhāvanāmārgeṇa Nc. bhāvanāmārgeṇa
 59) L. eva Ba. evaṃ Ns. evaṃ Nc. evaṃ Ui. evaṃ Tib. de ltar
 60) L. na tadanyo Ba. na tadanyo Ns. vā na tu Nc. vā na tu Umīno vā na tu
 61) L. lakṣaṇaḥ | iti Ba. lakṣaṇaḥ | iti Ns. lakṣaṇa iti Nc. lakṣaṇa iti
 62) L. tathā (Lの仏訳 tatra) Ba. tathā Ns. tacca Nc. tacca Ui tatra
 63) L. mataḥ (Lの仏訳 tataḥ) Ba. mataḥ Ns. atas Nc. atas Ui tatas
 64) yathā dvaya.....pravartate || 35 || (Lの仏訳 iti cittaṃ.....dharmāṇaṃ mataḥ

|| 35 ||)

Ns. cittaṃ citrābhāsaṃ.....atas tatra || 35 ||

Nc. cittaṃ citrābhāsaṃ.....atas tatra || 35 ||

Ui iti cittaṃ.....dharmābhāsaṃ tataḥ || 35 ||

Umino cittaṃ citrābhāsaṃ.....atas tatra || 35 ||

Tib. sems ni sna tshogs snañ ba dañ ||.....|| de phyir chos kyi na yin no || 35 ||

65) L. vastu Ba. vastutaś Ns. svataś (?) Nc. svatac A. svatac B. svatac
Nagao. vastutaś (Tib.) Ui. vastutaś Tib. ḥdi ñid (?) (eva ca tac ?) Umino. ca
tac

66) L. kuśalānāṃ (L の仏訳 kliṣṭānāṃ kuśalānāṃ vā) Ba. kliṣṭānāṃ
kuśalānāṃ vā Ns. kuśalānān Nc. kuśalānāṃ Tib. ñon moñs pa can dañ
dge ba

67) L. artha Ba. artha Ns. artha Nc. artha Nagao. artha Tib. don

68) L. ナシ Ba. ナシ Ns. ca Nc. ca Tib. dañ

69) L. nimittam evaṃ (L の仏訳 nimittam eva) Ba. nimittam evaṃ (nimittam
eva) Ns. nimittam evaṃ Nc. nimittam evaṃ Nagao. nimittam | evam
(Tib.) Tib. rgyu mtshan yin no || de ltar na

70) L. asaṃkalpa Ba. asaṃkalpa (asatkalpa ?) Ns. asatkalpa Nc. asatkalpa

71) L. prathama (L の仏訳 prathamā) Ba. prathamā Ns. prathama Nc.
prathamāṃ

72) L. parikalpitā nābhāvatā Ba. parikalpitānāṃ bhāvatā Ns. parikalpitā-
nāṃ bhāvatā Nc. parikalpitānāṃ bhāvatā Nagao. parikalpitānāṃ (l) bhāva-
tā (Tib.)

73) L. pariśuddhatvāt Ba. pariśuddhatvāt Ns. pariśuddhatvāt Ui pariśud-
dhatvāt

74) L. kleśa Ba. saṃkleśa Ns. kleśa Nc. kleśa Nagao saṃkleśa (Tib.)
Tib. kun nas ñon moñs pa

75)76)77) L. niṣpanda (L の仏訳 niṣyanda) Ba. niṣyanda Ns. niṣyanda Tib.
rgyu mthun (pa)

78) L. tathā (L の仏訳 tayā) Ba. tayā Ns. yayā Nc. yayā Ui yayā

79) L. parāvattiḥ Ba. parāvṛttiḥ Ns. parāvṛttiḥ Ui. parāvṛttiḥ

80) L. avikalpe na (L の仏訳 avikalpe) Ba. avikalpe Ns. avikalpena Nc.
avikalpena or avikalpene

81) L. aparaparyāyaḥ (L の仏訳 aparāḥ paryāyaḥ) Ba. aparāḥ paryāyaḥ Ns.
aparaparyāyaḥ Nc. aparaparyāya Ui aparaparyāyaḥ (or aparāḥ paryāyaḥ)
* Lévi 本 p. 64, l. 23 aparaparyāyo (XI. 39 の長行) 参照。

82) L. aparaprakāraś Ba. aparāḥ prakāraḥ Ns. aparaprakāraś Nc. aparā-
prakāraś

83) L. tad ābhāvāc (L の仏訳 tadabhāvāc) Ns. tadabhāvāc Nc. tadabhāvāc

84) É. Lamotte : Mahāyānasamgraha p. 128 (佐々木 p. 45) 参照。

85) L. punas tena (L の仏訳 punaḥ svena) Ba. punaḥ svena Ns. punas tenā-
manā Nc. punas tena Tib. deḥi [bdag ñid du]

86) L. svabhāva (L の仏訳 svabhāve) Ba. svabhāve Ns. svabhāve Nc. sve-
bhāve

87) L. svābhāvāt Ba. svābhāvāt Ns. svabhāvābhāvāt Nc. svabhāvāt A.
svabhāvāt B. svabhāvābhāvāt Nc. svabhāvāt Tib. ño bo ñid med paḥi
phyir

88) L. śacyātto (L の仏訳 śucyātmā) Ba. śucyātmā Ns. śucyātā Nc. śucyātā

89) L. の脚注 niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottara-niśrayāḥ | (L の仏訳 niḥsva-
bhāvatayā siddhā uttarottaranīśrayāt)

Ba. niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottaranīśrayāt Ns. Nc. 欠

90) É. Lamotte : Mahāyānasamgraha p. 128 (佐々木本 p. 45) 参照。

L の脚注 anutpādo 'nirōdhaś cādīśāntiḥ parinirvṛtiḥ ||

(L の仏訳 anutpannāniruddhādīśāntaprakṛti-nirvṛtāḥ)

Ba. anutpannā niruddhādīśānta-prakṛti-nirvṛtiḥ |

Ns. Nc. 欠

91) L. 欠 (L の仏訳 siddhā) Ba. siddhā Ns. Nc. 欠

92) L. niḥsvabhāvatābhir (L の仏訳 niḥsvabhāvatādibhir) Ba. niḥsvabhāva-
tādibhir Ns. niḥsvabhāvatābhir Nc. niḥsvabhāvatābhir Tib. ño bo ñid med
pa la sogs pa

93) L. anutpatti Ba. anutpatti Ns. anutpattika Nc. anutpattika

94) L. anyathā bhāvasyō Ba. anyathābhāvasyō Ns. anyathābhāvasyō Ui
anyathābhāvasyō

95) É. Lamotte : Mahāyānasamgraha p. 327 (佐々木本 p. 108) 参照。

96) L. kṛtvā Ba. kṛtvā | Ns. kṛtvā | Nc. kṛtvā |

97) L. kṛtvā (L の仏訳 kṛtvā |) Ba. kṛtvā | Ns. kṛtvā | Nc. kṛtvā ||

- 98) L. kṛtvā Ba. kṛtvā | Ns. kṛtvā | Nc. 欠
- 99) L. caritādanātmani (L の仏訳 caritānām ātmani) Ba. caritānām ātmani
Ns. caritānām ātmani Nc. caritānām ātmani
- 100) L. buddhāśaya (L の仏訳 buddhāśaya) Ba. buddhāśaya Ns. buddhāśaya
- 101) L. tanā-(L の仏訳 tenā-) Ba. tanā- Ns. tenā Nc. tenā
- 102) É. Lamotte: Mahāyānasamgraha p. 326. (佐々木本 p. 108) 参照
- 103) L. dṛṣṭānte ca (L の仏訳 dṛṣṭāntena) Ba. dṛṣṭāntena Ns. dṛṣṭāntena Nc.
dṛṣṭāntena or dṛṣṭāntena Tib. dpes
- 104) L. evaṃ Ba. evaṃ Ns. eva Nc. eva Tib. kho na (?)
- 105) L. ナシ Ba. ナシ Ns. tatreyamādīgāthā Nc. tatrāyamādīgāthā (or
tatreyamādīgāthā) Tib. de la tshigs su bcad pa dañ po ni ḥdi yin te
- 106) L. niśraya Ba. niśraya Ns. niśraye Nc. niśraye Tib. rten la.
- 107) L. niṣyandaphala Ba. niṣyandaphala Ns. niṣyandaphala Nc. niṣyan-
daphala A. niṣyandaphala B. niṣyandaphala Nb niṣyandaphala Ui
niṣyandaphala
- 108) L. abhisamkaraṇāt paramabodhiprāptaye |
Ba. abhisamkaraṇāt paramabodhiprāptaye |
Ns. abhisamkaraṇāt paramabodhiprāptaye |
Nc. abhisamkaraṇāt paramabodhiprāptaye |
Tib. mñon par ḥdu byed paḥi phyir ro || byañ chub dam pa thob par ḥgyur
baḥi phyir
Uj「(不疲倦決定を)作すからである。最高菩提を得んがために、(所対治と能対
治)」
漢訳「我今、為得無上菩提、於諸波羅蜜 応起四種随修」(大正31, 616b)
- 109) L. daśanām Ba. deśanām Ns. deśanām Nc. deśanām Ui deśanam
(deśanām?)
- 110) L. prāptaye Ba. pratyaye Ns. pratyaye Nc. pratyaye Nagao. pratyaye
Tib. rkyen 漢訳「諸縁」
- 111) L. āpañca (L の仏訳 ārthaṃ ca) Ba. ārthañ ca Ns. āthañca or ārthañ ca
Nc. āpañca?: Tib don du
- 112) L. pratisamvedanād (L の仏訳 pratisamvedanā) Ba. pratisamvedanā
Ns. pratisamvedanāt Nc. pratisamvedanā or pratisamvedanād
A. pratisamvedanā or pratisamvedanād B. pratisamvedanāt

- Nb. pratisamvedanā or pratisamvedanād Tib. so so yañ dag rig
- 113) L. āsadgrāha Ba. āsadgrāha Ns. āsadgrāha? Nc. āsamgrāha Tib. log
par ḥdsin pa
- 114) L. śūnyatā Ba. śūnyatādi Ns. śūnyatādi Nc. śūnyatādi Nagao.
śūnyatādi Tib. stoñ pa ñid la sogs pa
- 115) L. caturvidhamanaskāraḥ | caturvidham
Ba. caturvidhasamjñāmanaskāraḥ | caturvidham
Ns. caturvidhamanaskāraś caturvidham
Nc. caturvidhamanaskāraś caturvidham
Nagao. caturvidhasamjñāmanaskāraḥ | caturvidham
Tib. ḥdu ṣes rnam pa bshi yid la byed pa……
- 116) L. ābhinivartanāt (L の仏訳 ābhinivartanāt) Ba. ābhinivartanāt Ns.
ābhinivarttanāt Nc. ābhinivarttanāt Tib. mñon par ḥgrub pa.
- 117) L. āvasthāpanāt tad (L の仏訳 āvasthāpanā tad) Ba. āvasthāpanāt (āvasth-
āpanā?) tad Ns. āvasthāpanā | tad Nc. āvasthāpanā || tad Tib. ḥjog pa
[dañ]
- 118) L. śarudibhyaḥ (L の仏訳 śakrādibhyaḥ) Ba. śakrādibhyaḥ Ns. śanudi-
bhyaḥ or śanudibhyaḥ or śakradibhyaḥ? Nc. śannudityaḥ? B. śakradibhyaḥ
Tib. brgya byin la sogs pa
- 119) L. nirapekṣatā Ns. nirapekṣatānām | Nc. nirapekṣatānām ||
- 120) L. 欠 (L の仏訳 viśiṣṭa) Ba. [viśiṣṭa] Ns. 欠 Nc. 欠 Tib. mñon par
ḥphags pa (Myy 6388 abhyudgata) 漢訳「勝〔身〕」
- 121) 諸写本や Lévi 本に従い、sattveṣu→satveṣu と表示する。
- 122) L. 欠 (脚注 anantā ca mahārthā ca sahadāna-parivrṭtiḥ | naiṣṭhikī nirantarā
ca tathā pañcavidhā smṛtā || 69 ||)
(L の仏訳 samatā sarvasattveṣu dṛṣṭiś cāpi mahātmikā |
paraguṇaprātikāras trayāśāstir nirantarāḥ || 69 ||
Ba. samatā sarvasattveṣu dṛṣṭiś cāpi mahātmikā |
paraguṇa pratikāras trayāśāstir nirantarāḥ || 69 ||
Ns. 欠 Nc. 欠 私の還元梵語→『印度学仏教学研究』(第35巻第1号) p. 24で
発表。
- 123) Lévi 本に従って sattveṣu→satveṣu と表示する
- 124) []内は Ns 本、Nc 本などが欠けているため、Lévi の還元梵語。但し69偈(c-

- d) は私の訂正。
- 125) L. pratyayakārā (L の仏訳 pratyupakārā) Ba. pratyupakārā Ns. pratyupakārā Nc. pratyupakārā
- 126) L. satvāvaraṇā (L の仏訳 sattvārthācaraṇā) Ba. sattvārthāvaraṇā Ns. satvāthataṇā (sattvārthācaraṇā?) Nc. sattvārthataṇā Tib. sems can gyi don byed pa
- 127) L. avadhya (L の仏訳 abandhya) Ba. abandhya Ns. avandhya Nc. avandhya
- 128) L. cetanāt (L の仏訳 cetanā) Ba. cetanā Ns. cetanāt Nc. cetanāt
- 129) L. prativarṇikāyāṃ bhūtāyāṃ (L の仏訳 prativarṇikābhūtāyāṃ) Ba. prativarṇikābhūtāyāṃ Ns. prativarṇikāyāṃ bhūtāyāṃ Nc. prativarṇikāyāṃ bhūtāyāṃ
- 130) L. vyākṛta- Ba. vyākṛta- Ns. vyākṛte Nc. vyākṛte
- 131) L. prativarṇikā bhāvanāyāṃ (L の仏訳 prativarṇikābhāvanāyāṃ) Ba. prativarṇikābhāvanāyāṃ Ns. prativarṇikābhāvanāyāṃ
- 132) L. āvadhāraṇāt (L の仏訳 āvadhāraṇā) Ba. āvadhāraṇā Ns. āvadhāraṇāt Nc. āvadhāraṇāt Tib. nes ḥsin phyir Comm. agratvātmāvadhāraṇamanaskāraḥ
- 133) L. yātvā gatiṃ (L の仏訳 yāṃ yāṃ gatiṃ) Ba. yāṃ yāṃ gatiṃ Ns. yātmaṃ or yāsmaṃ Nc. yāstāṃ gatiṃ Tib. phan chad ḥgro ba gaṅ du
*Ns. yāsmaṃ は yasmiṃ と類似しているし、Tib. gaṅ du は yasmim の訳と思われる。
- 134) L. 'bhisamskāraṇāt | dānādīnāṃ (L の仏訳 'bhisamskāraṇāt dānādīnāṃ |)
Ba. 'bhisamskāraṇāt | dānādīnāṃ
Ns. 'bhisamskāraṇāt dānādīnāṃ |
Nc. 'bhisamskāraṇāt dānādīnāṃ ||
Tib. sbyin pa la sogs pa.....mñon par ḥdu byed paḥi phyir yo ||
- 135) L. dharbha Ba. dharma Ns. dharma Ui. dharma
- 136) L. bhede (Ms śubhede) Ba. bhede Ns. prabhede Nc. prabhede Tib. rab tu dbye ba
- 137) L. laghukāyā Ba. labdhakāyā Ns. labdhakāyā? Nc. labdhakāyā Nagao. labdhakāyā
- 138) L. bahumāna Ba. bahumāna Ns. bahumānā Nc. bahumānā

*韻律の上からは bahumāna (短音 a が必要) がよい。

- 139) L. cittatva (L の仏訳 vibhutva-) Ba. vibhutva- Ns. vibhutva- Nagao. vibhutva
- 140) L. laghukāyā Ba. labdhakāyā Ns. labdhakāyā? Nc. labdhakāyā Nagao. labdhakāyā
- 141) L. cārogyaṃ (L の仏訳 cārogye) Ba. cārogye Ns. cārogyo Nc. cārogyo
- 142) 『梵天所問經』の四法品第二(大正15, 35c) 参照。
- 143) L. dharbhaiḥ (誤植) Ns. dharmaiḥ
- 144) L. kalpa Ba. kalpa Ns. kalpā Nc. kalpā
- 145) L. kalpāḥ Ba. kalpāḥ Ns. kalpā Nc. kalpā
- 146) 『大般若波羅蜜多經』卷四(大正5, 17b-c)、Ghoṣa. śatasāhasrikāprajñāpāramitā p. 118
- 147) L. svatatvaḥ Ba. satattvā Ns. satatvaḥ Nc. satatvaḥ Nagao. satattvā